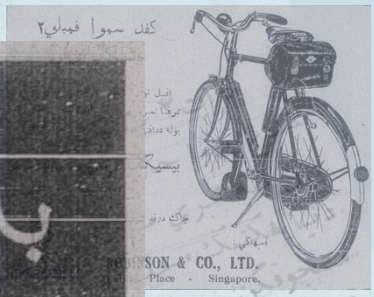
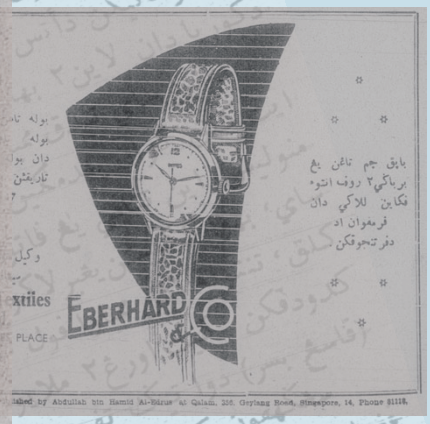
CIAS Discussion Paper No. 40

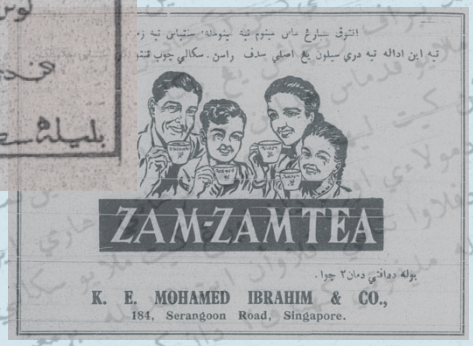
『カラム』の時代 V

近代マレー・ムスリムの日常生活

坪井 祐司・山本 博之 編著







京都大学地域研究統合情報センター

CIAS

CIAS Discussion Paper No. 40

『カラム』の時代V

近代マレー・ムスリムの日常生活

坪井 祐司・山本 博之 編著

CIAS
京都大学地域研究統合情報センター

CIAS Discussion Paper No. 40
TSUBOI Yuji and YAMAMOTO Hiroyuki (eds.)
The Age of *Qalam* V — Everyday Life of Modern Malay Muslims

© Center for Integrated Area Studies, Kyoto University
46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi,
Kyoto, 606-8501, Japan

TEL: +81-75-753-9603
FAX: +81-75-753-9602

E-mail: ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp

http://www.cias.kyoto-u.ac.jp

March, 2014

目次

序『カラム』の時代V
近代マレー・ムスリムの日常生活
坪井 祐司 …… 4

カラムが切り取った世界
写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観
坪井 祐司 …… 9

1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化
光成 歩 …… 19

マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育
金子 奈央 …… 24

『カラム』と独立準備期マラヤにおける宗教的世界観とナショナリズム
モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン（翻訳 鈴木 真弓）…… 29

東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト
2013年度の活動紹介
山本 博之 …… 35

序『カラム』の時代Ⅴ
近代マレー・ムスリムの日常生活

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(*Qalam*)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをまとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の五編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去四編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1.『カラム』について[1)]

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス(Edrus)[2)]により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム[3)]化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他の東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した[4)]。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であり、民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に関心が集中している。このため、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の

1)『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

2)本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げた。彼の伝記として[Talib 2002]がある。

3)現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

4)編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本2002a: 263]。

動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにする上で貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集成したうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2.『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）の共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像（研究代表者：坪井祐司）」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で５年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである[5)]。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトの現時点の成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1)『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。それをもとに、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これによってローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている[6)]。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字へと翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト（雑誌データベース班）による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア（Klasika Media）社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。プロジェクトメンバーのジュリアン・ブルドン（京大地域研）により、翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにする『カラム』データベースの改良も進行中である。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。これに関してさしあたり期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌

5）「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照（http://ylabo222.wix.com/jawi#）。

6）『カラム』のデータベースについては、京大地域研のホームページを参照（http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM）。

面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている[7]。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコーダンスプロジェクト（以下MCプロジェクトと略記）との連携である[8]。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコーダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

（2）ジャウィ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウィ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウィを学ぶ機会を提供することと、ジャウィに関心を持つ研究者のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年１回行っており、2013年は地域研究コンソーシアム、日本マレーシア学会との共催により10月13、14日の２日間に実施した。講習会は、2011年から日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催している。今回も例年通り外語大の学生を中心に多数の参加者を得ることができ、あらためてジャウィに対する関心の高さが示された。

研究会では、講習会のための教科書『ジャウィを学ぶ』を編集した［坪井・山本編2013b］[9]。これは、ジャウィの読み方・綴り方を開設した［山本2002b］を採録したジャウィ講読の初級編、『カラム』記事から引用した講読テキスト、近代におけるジャウィの定期刊行物（『ジャウィ・プラナカン』、『アル・イマム』など）の実物を掲載しその解説を行った「さまざまなジャウィ文献」、研究会メンバーが各自の専門分野におけるジャウィ資料を紹介・解説した「資料編」からなっている。

7）京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、［山本編 2010: 6］を参照。
8）詳細については、プロジェクトのホームページを参照（http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html）。
9）この教科書は、2011年に編集された初版をもとに、資料編等で新たな内容を収録した改訂版である。

（3）『カラム』共同研究

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を利用した研究を行っている。共同研究では年に３回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年１回発行されており、これが５編目となる。その内容については次節で紹介することとしたい。

さらに、2013年度に顕著な進展を見せたのは、国際的提携の分野である。プロジェクトでは『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアにおける共同事業や成果の発信に努めている。

2013年度からは、京大地域研とクラシカ・メディア社、マレーシアジャウィアカデミー（Akademi Jawi Malaysia）との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。2013年９月11日には、京大地域研の林行夫センター長などが参加して事業の立ち上げを記念する会議がクアラルンプルのプトラ・ホテルで行われた。この会議には、主筆エドルスの遺族の出席を得ることができた。

電子出版事業は以下の二つからなる。第一には、ローマ字翻字された『カラム』記事の中から現在の読者の関心が高いと思われるものを抜粋して復刻するものである。そのなかには、エドルスの「独立インドネシアン訪問（Melawat Indonesia Merdeka）」、ブルハヌッディン・アルヘルミの「マラヤにおける民族主義闘争（Perjuangan Kebangsaan di Malaya）」などが含まれる。第二は『カラム』の研究の出版である。プロジェクトの共同研究の成果の一部として、論文集『伝統から将来へ：カラム誌論集１（Dari Warisan ke Wawasan: Selected Writings on Majalah Qalam Volume 1）』が出版され、今後も続いていく予定である。

2013年12月20、21日には早稲田大学イスラーム地域研究機構、マラヤ大学アジアヨーロッパ研究所などの共催による国際会議「イスラームと多元文化主義」にセッション企画を組む形で参加した。セッションでは、モハメドシュクリ（Mohamed Syukri Rosli、クラシカ・メディア）、ジュリアンがデジタルアーカイブの構築と利用について、光成歩と坪井がデータベースを利用した研究について報告し、出席したマレーシア人研究者を含めて『カラム』の現在的意義についての活発な議論が交わされた。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出

版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集の各論考は、写真、広告、連載コラムといった『カラム』の象徴的な特徴を分析し、その世界観を描き出そうとするものである。以下、その内容を簡単に紹介したい。

坪井祐司「カラムが切り取った世界 ── 写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」

坪井は、『カラム』に掲載された写真をとりあげている。『カラム』は国際ニュースを中心に全世界で撮影された多様な写真を掲載した。これらの写真は、さまざまな地域で戦争や政治運動がおこった激動の時代を映しだしている。写真は、『カラム』を発行する東南アジアのイスラム知識人の視角により切り取られており、ヨーロッパの植民地統治からの独立、西洋近代がもたらした政治・経済体制からの脱却を目指すムスリムの運動が描かれた。同時に、『カラム』は市井の個人や都市の景観も多くとりあげており、特に社会に進出する女性に焦点が当てられた。ただし、女性には、イスラム対西洋近代の構図のなかで、あくまで宗教的な正しさが求められた。『カラム』は、アメリカに代表される近代性に憧憬を示す一方で、過度な西洋化も批判した。女性の地位をめぐる近代主義とイスラムの葛藤は、現在にまで続く課題といえる。

光成歩「1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化」

光成は『カラム』に掲載された広告を取りあげた。広告からは、当時のムスリムたちがどのような市場のなかに身を置いていたのかを知ることができる。広告にはときに複数の言語が横並びに書かれ、商品の売り手、買い手の多様性が表れていた。市場を構成する事業者は、華人、インド人、アラブ人、マレー人、ヨーロッパ人など多様であった。ヘアオイルや香水などでは宗教的な価値をアピールする商品が多くみられたが、すべてがそうであったわけではなく、電化製品や時計など、ヨーロッパやアメリカからの輸入商品としての質やデザインのよさが強調されたものも多かった。宗教や中東と結びつけて語られる付加価値は、高級感や質を担保するみなされた商品もあったが、横並びの様々な付加価値のなかの一つにすぎないものであった。

金子奈央「マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育」

金子は、読者からの寄せられた様々な相談にイスラム教の立場から答える連載コラム「千一問」をとりあげ、家族、子ども、教育といった話題がどのように扱われたかを分析した。そこでは、最も身近な集団である家族がいかにして築くかについて多くの質問が寄せられ、回答では「正しい人間」を育てるための家庭および宗教の責任、重要性が強調された。また、教育については、マレー人の学業においての立ち遅れが議論とされたが、問題はマレー人という民族ではなく彼らがおかれた環境によるとされ、同時に正しい人間となるためのイスラム教育の重要性が強調された。イスラム教の教えに基づいた正しい人間としての道徳心や信仰心を持つことが、個々人の人生においても、またマラヤの発展にとっても重要であるという考えが基盤となっていたと考えられる。

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン（訳 鈴木真弓）「『カラム』と独立準備期マラヤにおける宗教的世界観とナショナリズム」

本書にはマレー人研究者による『カラム』に関する論稿も収録した。『カラム』は1950年代から1960年代のシンガポール、マレーシアで広範な読者を得た定期刊行物として史料的価値が高いにもかかわらず、マレーシアの現代史研究では長く光を当てられてこなかった。刊行地が移ったこともあって図書館等で体系的に収集されていなかったことや、ローマ字が普及してジャウィの書物が読まれなくなった等の理由のほかに、『カラム』の創刊者・編集者エドルスが与党UMNOや宗教指導者に批判的だったことなどが理由に挙げられる。ムハンマド・ファリドは『カラム』の記事内容を検討し、当時のムスリムが西洋による科学技術の進歩から取り残されることや東側陣営からの共産主義の脅威に対抗するためにイスラム教に根ざした同胞意識の養成を掲げており、建国期のマレー・ナショナリズムの育成に重要な役割を果たしたとして、その資料的価値を評価した。マレーシア現代史研究において『カラム』が再評価されることは、建国50年を経てマレーシア史の見直しが行われるなかで重要な意義がある。

山本博之「東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト――2013年度の活動紹介」

『カラム』は、京大地域研によりローマ字翻字とオンライン・データベースの制作が進められてきた。これによってマレーシア国内でも『カラム』記事へのアクセスが容易になり、研究が進むと同時にそれを利用した取り組みがマレーシアで見られるようになった。マレーシアでジャウィ教育教材として『カラム』が活用されるようになり、ローマ字翻字版とジャウィ版を左右に併記した復刻版がマレーシアの公立図書館に配架される予定である。『カラム』のコラムを抜粋してローマ字で刊行した電子ブックも刊行されるなど、マレーシア社会が積極的に『カラム』に価値を見出し、利用しようとしている。日本を拠点に始まった『カラム』プロジェクトがマレーシアにどんなインパクトを与えつつあるかについては山本の論稿を参照されたい。

4.『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の３編の論考から浮かび上がる『カラム』の特徴とシンガポールを中心とするマレー・ムスリムにとっての1950年代という時代性について簡単に記してみたい。

『カラム』は、第二次世界大戦後のマレー語出版界の活況なかで登場した雑誌である。この時期、ナショナリズムに代表される政治運動の高揚にくわえて、多色刷りで写真をふんだんに使用した大衆的な雑誌も増加した。カラム出版社は、『カラム』のほかに『フィルム(Film)』、『アネカ・ワルナ(Aneka Warna)』など娯楽色の強い雑誌も発行していた[Hamedi 2013: 58]。『カラム』の記事の多くは政治や宗教を扱うものであったが、マレー語出版物の大衆化という時代のなかで位置づける必要がある。

このため、『カラム』は写真や広告など読者の視覚に訴える要素を多分に持っていた。また、「千一問」のような読者からの投稿欄も設けられており、双方向性を持っていた。そこから、執筆に携わった知識人だけではなく、読者として想定される主に都市部のマレー・ムスリムの世界観や生活の様子をうかがうことができる。

そこにうかがえるのは、西洋近代が圧倒的な力を持っていた時代、しかもムスリムが少数派である都市部において、彼らが自らの宗教的な正しさと社会との折り合いを模索する姿である。『カラム』の時代、西洋近代の諸制度とその物質文化はゆるぎないようにみえた。その先頭を走るアメリカの写真や、欧米の製品の広告が頻繁に掲載されたことはそれを物語る。その西洋近代がもたらした国家制度のなかの教育も肯定的に受け止められた。他方、近代生活を送るうえで宗教的な正しさが求められる点も指摘されている。家庭や個人の育成におけるイスラム教育の役割が強調され、宗教的に正しい商品には付加価値がつけられた。その一方、女性の社会における位置づけなど、イスラム教と西洋近代との間に齟齬がみられる部分は論争の種となった。写真、広告、コラムを通じて『カラム』という雑誌全体を俯瞰することで、当時のムスリムが近代の多民族社会の中で自らを位置づけようとする過程をうかがうことができるのである。

参考文献

Hamedi Mohd Adnan. 2013. *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan.* Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

坪井祐司、山本博之編 2011『『カラム』の時代Ⅱ――マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No.19)京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2012『『カラム』の時代Ⅲ――マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』(CIAS Discussion Paper No.23)京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2013a『『カラム』の時代Ⅳ――マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32)京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b『ジャウィを学ぶ』(CIAS Discussion Paper No.38)京都大学地域研究統合情報センター。

山本博之 2002a「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259−343。

山本博之 2002b「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方:20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359−382。

山本博之編 2010『『カラム』の時代――マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)京都大学地域研究統合情報センター。

カラムが切り取った世界
写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観

坪井 祐司

はじめに

本論では、1950年代初頭に『カラム』誌に掲載された写真に焦点をあて、創刊当初の同誌の世界観を明らかにすることを試みる。

『カラム』の一つの特徴は、写真を多く掲載したことである。当時、多色刷りで写真をふんだんに使用した大衆紙が増えた。『カラム』を出版したカラム出版社(Qalam Press)は、ほかに『フィルム(Film)』、『アネカ・ワルナ(Aneka Warna)』など娯楽色の強い雑誌も発行していた[Hamedi 2013: 58]。『カラム』は政治や宗教の色彩が強かったが、そこでも多くの写真が使用された。

『カラム』には毎号表紙に大きな写真が掲載されたのに加えて、写真の紹介をメインとするコーナーが4ページ前後設けられていた。CIASの『カラム』雑誌記事データベースで「写真(gambar)」で検索すると、写真をメインとする記事・見出しが20年間で697件あることがわかる[1)]。さらに、文章記事の中に小さな写真が含まれていることも多く、毎号20〜30点の写真が掲載されていた。この時期、戦後のマレー語の新聞・雑誌の発行は一つのピークを迎え、中身も多彩なものとなった。

本論は、試論として1950〜52年(第1号〜第29号)における『カラム』に掲載された写真をとりあげ、記事の論調と関連付けながらその特徴を明らかにする。『カラム』は政治経済から宗教、文化まで多様な記事を含んでいるが、写真が威力を発揮するのは同時代における国際的なニュース記事である。1950〜52年に「写真」で検索される記事88点をみると、写真が撮影された地域は多岐にわたっている(表1)。『カラム』の写真を概観することで、編集者がどのような世界を切り取り、どのようなイメージを発信していたのかを考えてみたい。

本論では、『カラム』に掲載された写真を地域ごとに概観する。第一節では東アジア、第二節ではイスラム世界、第三節ではアメリカに関して、それぞれの写真の特徴と編集部の視角を読み解く。第四節では、『カラム』の大きな特色と思われる女性の写真をとりあげ、同誌の発行が開始された1950年代初頭の時代的特徴とシンガポールにおけるイスラム知識人たちの世界観を考察する。

表1 地域別の『カラム』写真記事の点数(1950〜52年)[2)]

インドネシア	34	シンガポール	7
パキスタン	13	朝鮮	5
エジプト	10	アメリカ	3
マラヤ	8	ベトナム	2

出典:CIAS『カラム』データベース

1. 東アジア:アジアにおける戦争の時代

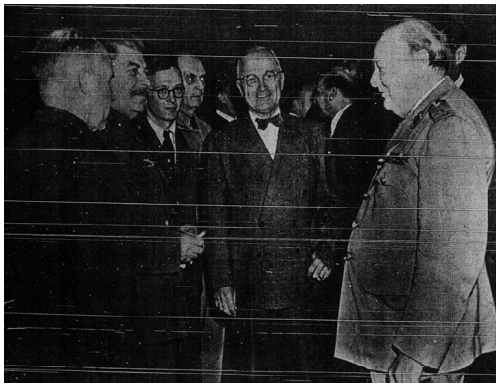
非イスラム圏のアジア地域、東アジアおよび大陸部東南アジアでとりあげられたのは朝鮮とベトナムであった。これは、両地域の脱植民地化の過程で大国が介入する戦争が勃発し、国際政治の焦点となったためである。『カラム』が発刊された1950年は、第二次世界大戦の記憶が冷めやらぬなか、東西冷戦に突入した時代であった。ただし、アジアにおいては冷戦ではなく実際に戦争が起こっており、その写真が数多く報道された。

創刊号(1950年7/8月)には第二次世界大戦に関する記事があり、1940年にイギリス軍がダンケルクから撤退したときの写真が掲載されている[*Qalam* 1950.7/8: 15]。第8号(1951年3月)の表紙では、USIS[3)]の提供として、1945年のポツダム会談(スターリン、ルーズベルト、チャーチル)の写真が掲載された(写真①)。彼らの話し合いによって決定された連合国によ

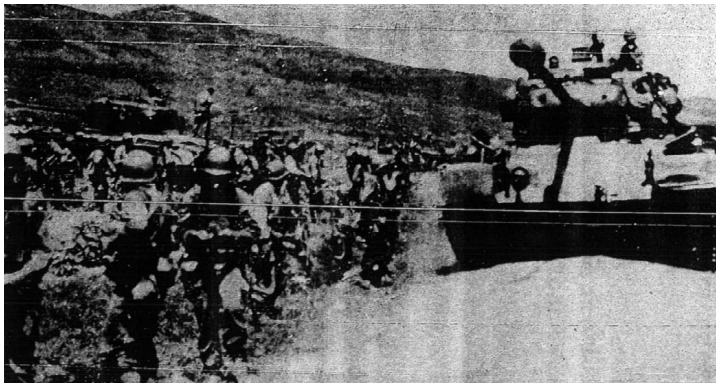
1) http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM

2) 写真の撮影地(被写体ではない)ごとに分類したもの。このほかに1点のみの地域が6か所(サウジアラビア、フィリピン、イラン、トルコ、チュニジア、レバノン)ある。

3) アメリカの情報宣伝を担当したUnited States Information Serviceを指すと思われる。



写真①



写真②

る第二次大戦の戦後処理が混乱をもたらしたという解説がつけられている［*Qalam* 1951.3: 1］。

『カラム』が創刊された1950年に始まった朝鮮戦争には大きな関心が示された。創刊号では朝鮮の歴史と現在の戦争を地図つきで解説する記事が掲載された。アメリカのAP通信の写真として、アメリカ軍の兵士や司令官マッカーサーなどが掲載されており、説明では北朝鮮軍がロシア戦車を使用していると述べている［*Qalam* 1950.7/8: 18－21］。朝鮮戦争の写真は1951年２月の７号まで連続的に掲載され、戦闘中のアメリカ軍や戦車、飛行機などの兵器、避難する民間人など、生々しい写真が多く掲載された（写真②）。第５号（1950年12月）にはアメリカ大統領トルーマンに関する記事が掲載されるとともにトルーマンとマッカーサーが会談した際の写真を掲載し、「この会談が極東におけるアメリカの方針を話し合うものだったため、世界中の注目を集めた」と紹介した［*Qalam* 1950.12: 23］。第７号では、中国軍の攻撃を受けるアメリカ軍の写真を掲載し、「朝鮮戦争は第三次世界大戦となるのか？　とみんな呆然としている。和平に関する協議がまだなされていないため、このような考えに至るのだ」と書いている［*Qalam* 1951.2: 26］。

同時期に行われていたのが第一次インドシナ戦争である。第７号では「共産中国が南のインドシナへと侵攻（Komunist China merempuh ke selatan ke Indochina）」と題して、フランス軍の写真とともに、サイゴンの中国領事が捕虜を監視するフランス軍人と会話する写真を掲載し、「ホーチミン軍ではバオダイ（Bao Dai）[4]・フランス軍に対抗できないため、共産軍が援軍として南下している」と解説した［*Qalam* 1951.2: 23］。第18号（1952年１月）では、「マラヤと同様インドシナの状況も平和が破れて混乱している」として、共産党の武装蜂起により非常事態が宣告され、軍が強大な権限を握ったマラヤと対比して描いた［*Qalam* 1952.1: 20－21］。

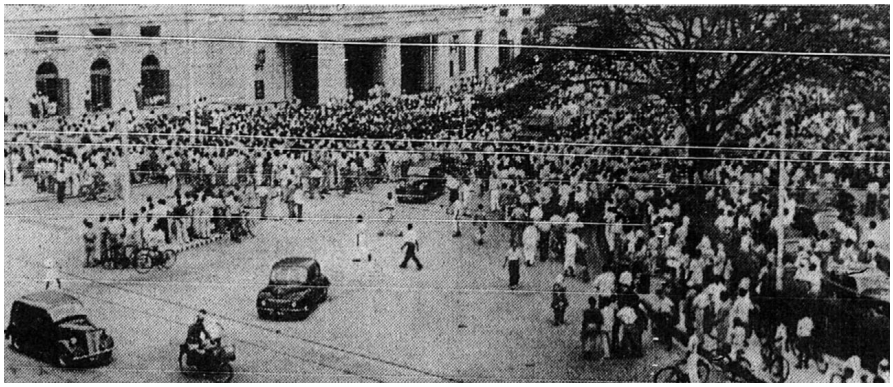
朝鮮、ベトナムの事例における『カラム』の報道および写真は、どちらかといえばアメリカ、フランスの当局側にたったものであった。その根底にあったのは、宗教を否定する共産主義への警戒感と思われる。このため、朝鮮やベトナムの民族解放への共感を示すことはなく、むしろ冷戦体制下の西側からの視点で二つの戦争をとらえていた。

２．イスラム世界――脱植民地化・国民国家建設のなかのイスラム勢力

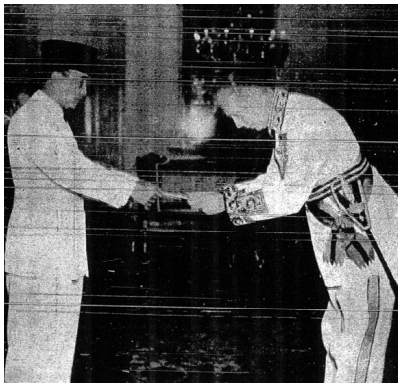
『カラム』が掲載した写真の圧倒的多数は島嶼部東南アジアから南アジア、西アジア、北アフリカまで広がるイスラム世界のものであった。『カラム』の時代、この地域の共通課題は脱植民地化、国民国家建設であった。すでに独立していた国から独立を目指す地域まで状況は多様であったが、ヨーロッパ勢力および世俗的な国家建設を行おうとする勢力にイスラム勢力が対抗し、『カラム』が後者の立場から報道するという構図は共通していた。

『カラム』の出版地シンガポールはインド洋を中心とするムスリムの移民の結節点であり、編集者エドルスはアラブ系であった。このため、『カラム』はイスラム勢力の統合を目指す動きに敏感であった。多くの地域から代表が集まってイスラムの結束を確認する会議がたびたび報道されたが、そこでは参加国を明記したボード等をもった参加者たちの写真が掲載され、イスラム世界の広がりが示された。第９号（1951年４月）に

4）バオダイ（1913－1997）はフランスの保護国として植民地化されたベトナム・阮朝の第13代の皇帝であった。第二次世界大戦後のホーチミンによる八月革命、ベトナム民主共和国の成立過程で退位に追い込まれたが、1949年にフランスの支援により建国されたベトナム国の元首となった。



写真③



写真④

はカラチのイスラム学者会議(Persidangan al-alam al-Islami)にパレスチナ、パキスタン、トルコなど各国代表が集まった写真が掲載され[*Qalam* 1951.4: 20]、第21号(1952年4月)では同じくカラチで行われた世界ウラマ大会(Muktamar ulama Islam sedunia)の様子が報道されている[*Qalam* 1952.4: 20-21]。

● 東南アジア

以下、地域ごとに写真をみていきたい。東南アジアのイスラム圏は『カラム』にとって地元であった。『カラム』はマラヤを「祖国(tanah air)」とみなしていたが、マラヤ・シンガポールに関しては、記事は多いものの写真はそれほど多く掲載されていない。地元の報道写真に関しては月刊誌である『カラム』は速報性が低かったためであろう。

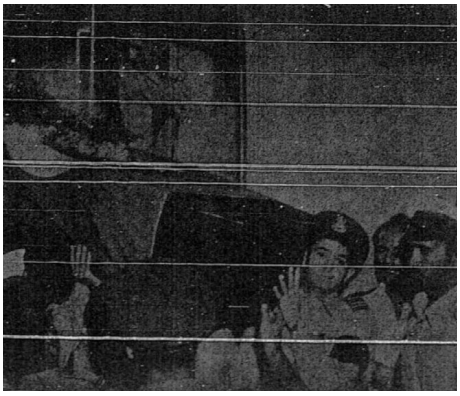
そのなかで、『カラム』創刊当初のシンガポールにおいて大きな話題となったのは、ナドラという少女の改宗・結婚をめぐる事件である。シンガポールの裁判所がナドラのキリスト教からイスラム教への改宗およびムスリム男性との結婚を認めず、判決に不満を覚えたシンガポールのムスリムの抗議行動を当局が鎮圧し、18名の死者が出た(1950年12月)[5]。『カラム』は第2号(1950年9月)でこの問題の展開を詳しく報じ、ナドラと養母の写真を掲載した[*Qalam* 1950.9: 29]。第6号(1951年1月)では、「ナドラのために! 不満が引き起こした暴動(Keranamu Nadrah! Rusuhan Berbangkit Kerana Tak Puashati)」という写真記事が掲載された。そこでは、イスラム旗を掲げて裁判所を取り囲む群衆や、警察、軍隊により検問を受けるムスリムの写真が掲載され、イギリスが動員したグルカ兵が怒りを買ったと述べられている[*Qalam* 1951.1: 22-23](写真③)。

一方で、隣国のインドネシアは、表1からもわかるとおり、最も写真が多く掲載された。毎号のように写真記事が掲載され、政治情勢が逐一報道されている。第2号では、8月15日のインドネシア連邦共和国の閣議の写真が掲載され、統一国家の形成が合意されたことが報じられた[*Qalam* 1950.9:24][6]。写真はシンガポールのインドネシア共和国情報局と記されており、スカルノ政権から直接提供されていたことがわかる。第4号(1950年11月)の表紙には、10月にオランダの高等弁務官がスカルノ大統領に主権移譲に関する書面を手渡しているAP通信の写真が掲載された(写真④)。説明では「オランダ人はスカルノ大統領に頭を下げ敬意を表せざるを得なかった」と書かれた。「オランダ植民地期には同じ場所でインドネシアの有力者たちがオランダの総督に頭を下げていた」ことと対比して、時代の移り変わりを象徴させたのである[*Qalam* 1950.11: 2]。同号には記事とは関係なく同国人女性と一緒にいるオランダ兵の写真が掲載され、「オランダの兵士たちは帰国前にやることもなく、暇をつぶしている」という解説が付けられた[*Qalam* 1950.11: 32]。

その後もスカルノの写真は毎号のように『カラム』に登場しており、当時のマレー・インドネシア地域のムスリムにとって建国の英雄であったことがわかる。ただし、『カラム』が全面的にスカルノを支持していたわけではなかった。『カラム』はイスラム団体の連合

5)ナドラ(マリア)はオランダ領東インドでオランダ人両親に生まれ、第二次世界大戦中マレー人女性に引き取られてマラヤにやってきた。戦後オランダに戻った両親はマレー人養母にナドラの引き渡しを求め、シンガポールにて裁判となった。裁判中ナドラはムスリム男性との結婚を発表したが、裁判所はオランダ人両親側の主張を認め、ナドラの改宗・結婚を認めなかった。この件に関する『カラム』の報道については、[坪井 2011]を参照。

6)インドネシアは、オランダとの独立戦争を経て、スカルノのインドネシア共和国と15の地方国家からなるインドネシア連邦共和国が成立し、オランダから主権が移譲された(1949年12月)。しかし、インドネシア共和国が地方国家を吸収する形で翌50年8月に単一のインドネシア共和国が成立した。



写真⑤

により結成されたマシュミ党(Masyumi)[7]を支援していた。第5号においてはマシュミ党の勢力拡大が報道され、同党の指導者講習会にインドネシア全土の60地域から代表が出席したときの集合写真や支部の集合写真などが掲載された。そこでは同党が全国に支部を持ち、イスラムに基づくインドネシア統治を目指す政策を持っていると解説がつけられた[*Qalam*1950.12: 15–20]。第27号(1952年10月)には、マシュミ党のジャカルタ本部で女性たちに囲まれるスカルノ大統領の写真が掲載されている[*Qalam* 1952.10: 41]。当初スカルノを支えていたマシュミ党だが、イスラム国家建設を否定したスカルノとの関係は悪化し、『カラム』もスカルノに対して徐々に批判に転じていくことになった[8]。

● 南アジア

パキスタンの写真はインドネシアに次いで多かった。インド・ムスリムが影響力を持っていたシンガポールにおいて、1947年にインドからムスリム地域が分離する形で独立したパキスタンの情勢は関心を集めた。当時の大きなニュースはリヤーカト・アリー・ハーン首相(Liaquat Ali Khan)[9]が1951年10月に暗殺されたことであった。『カラム』では、第16号(1951年11月)で「世界を驚かせた恐ろしい暗殺(Perbunuhan yang dahsyat memeranjatkan dunia)」として、パキスタン政府情報局から提供されたラワールピンディにおける現場写真やカラチにおける葬列が掲載されている(写真⑤)[*Qalam* 1951.11: 19–20]。翌17号(1951年12月)ではハムカ(HAMKA)[10]による追悼記事とともに葬儀の写真が掲載された[*Qalam* 1951.12:15–16]。もう一つはインドとの国境紛争であるカシミール問題である。16、17号では、ムスリム(パキスタン)側からみたカシミールの歴史や紛争についての記事が掲載され、パキスタン軍の聖戦士(Mujahiddin)や悲しみにくれるカシミールの女性の写真が掲載されている[*Qalam* 1951.11:5, 1951.12: 37]。

● 西アジア

西アジアでとりあげられることが多かったのは、東南アジアとの人的交流も深く、イスラム思想の中心でもあったエジプトである。エジプトはすでに独立国家であったが、『カラム』は以下の二点に注目した。一つ目は世俗的な政権に対抗するイスラム勢力の動向である。第14号(1951年9月)ではムスリム同胞団の勢力拡大についての記事が掲載され、首脳陣や本部の写真が掲載された[*Qalam* 1951.9: 27–28][11]。第二はエジプト国内に残ったヨーロッパの経済権益を回収する動きである。第17号では「エジプトが新たな問題を起こす(Mesir membuat masalah baharu)」として、スエズ運河からの撤退要求に対してイギリスが派遣した軍艦の写真が掲載され[*Qalam* 1951.12: 19]、翌18号(1952年1月)にはスエズ運河の歴史が地図やレセップス、グラッドストーンの肖像などとともに描かれた[*Qalam* 1952.1: 26]。第22号(1952年5月)には、イギリス資本のバークレイズ銀行が放火された写真がみられる[*Qalam* 1952.5: 6][12]。

イスラム勢力対世俗派・欧米という図式は他地域でもみられた動きである。世俗派対イスラム派という国内の政治対立でとりあげられたのはトルコであった。

7) マシュミ(インドネシアムスリム評議会 Majlis Syuro Muslimin Indonesia)は1943年日本軍政のもとで結成されたムハンマディア(Muhammadiah)、ナフダトゥル・ウラマ(Nakhdatul Ulama、NU)などイスラム団体の連合体であった。独立後は国内最大規模の政党へと発展したが、1952年にNUが脱退して分裂し、55年の総選挙では第2党にとどまった。スカルノは1960年、西スマトラの武装蜂起に加担者を出したという理由でマシュミを非合法化した。

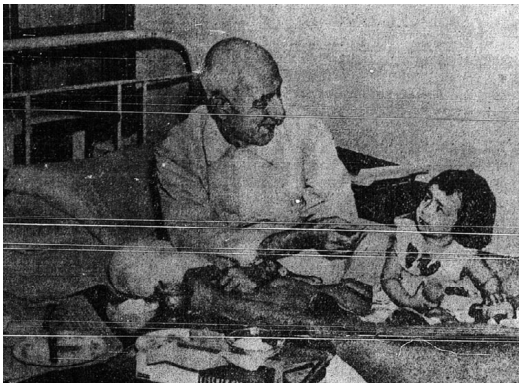
8) 1950年代後半の『カラム』のインドネシアへの評価については[坪井 2013: 25]を参照。

9) リヤーカト・アリー・ハーン(1895–1951)は英領インドにムスリム連盟に加わり、パキスタンの分離独立を指導してジンナー総督のもとで初代首相に就任した。

10) ハムカ(本名アブドゥルマリク・カリム・アムルッラー Abdul Malik Karim Amrullah, 1908–1981)はインドネシアのイスラム改革主義を主導したウラマ・著述家である。『カラム』の寄稿者の一人でもあり、CIASデータベースからは14件の記事が検索できる。

11) 『カラム』の主筆エドルス(Edrus)は1956年に同誌上でムスリム同胞団の結成を宣言する[山本 2002: 263]。

12) 地中海と紅海(インド洋)をつなぐスエズ運河は1869年フランス人レセップスの主導により開削された。イギリスは1875年に運河を買収すると、アラービー運動を契機にグラッドストーン政権が軍事介入して運河を支配下に置いた(1882年)。第二次世界大戦後もイギリス軍の駐留が続いたため、1951年エジプト政府は軍の撤退を要求、52年1月には反外国人暴動がおこった。第17号、18号はこの経緯を報道したものである。



写真⑥

写真⑦

第12号(1952年1月)では「再びイスラム化するトルコ(Turki diislamkan semula)」として、1950年の総選挙の結果を受けて民主党のジェラル・バヤル(Celal Bayar)政権が誕生したことにより[13]、ケマル・アタチュルク以来の世俗主義が転換されてイスラム色が強まるという観測記事が掲載され、モスクで祈りをささげるトルコのムスリムの写真が掲載された[*Qalam* 1952.1: 12–13]。トルコの世俗化政策は『カラム』の批判の対象であった。第24号(1952年7月)には、「イスラム国であったトルコはケマル・アタチュルクの時代に西洋文化にとってかわられてしまった」として、海岸で海水浴をするトルコ人の写真が掲載された。次のページには「モスクにはアラビア文字が描かれ、真のイスラム芸術がみてとれる」としてモスクの写真が載せられた[*Qalam* 1952.7:23–24]。同じ号にはオスマン朝によるコンスタンティノープルの占領の記事が掲載されたが、そこではイスタンブルやボスフォラス海峡の写真にくわえて洋装するトルコ人の写真があった。「トルコ人は自民族の家を出て西洋的な服装をしている。ケマル・アタチュルクによりトルコ人の間には西洋文化が浸透した。我々もこれに倣うのか?」と疑問を投げかけたのであった[*Qalam* 1952.7: 54–59]。

欧米との経済権益をめぐる対立に関しては、イランの例がある。第17号は、石油の国有化政策を行ったイランのモサッデグ(Mohamed Mosaddegh)首相[14]を「寝室から国政を指揮する人物」として紹介している。寝室で親戚の娘と遊ぶモサッデグの写真が掲載され、「病気のためいつも寝室にいるが、イラン国民は彼が石油を自民族のものとするという世界を揺るがす難しい問題を解決することに全幅の信頼を寄せている」という解説がついている(写真⑥)[*Qalam* 1951.12: 17]。

● 北アフリカ

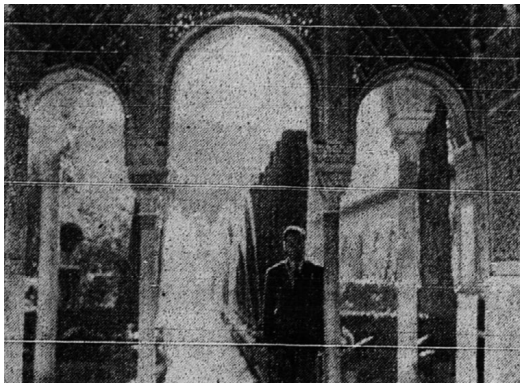
北アフリカでは、いずれもフランスの植民地であったモロッコ、チュニジアの独立運動が取りあげられた。第11号(1951年6月)では「モロッコが世界の注目の的に(Maghribi al-aqsa menjadi tumpuan perhatian dunia)」と題する記事でモロッコのフランスに対する独立運動が取り上げられ、モロッコ軍やラバト市街の写真が掲載された[*Qalam* 1951.6: 12–14]。第22号には「チュニジアがフランス権力の手中に(Tunisia terletak di bawah teluntuk kekuasaan Perancis)」という記事のなかでチュニジア人を逮捕するフランス兵の写真が掲載され、同じ号に「チュニスの女性は家を出て独立のため戦う(Kaum ibu di Tunisia keluar memperjuangkan kemerdekaannya)」という政治活動に参加する女性たちをとりあげた写真記事が掲載された(写真⑦)[*Qalam* 1952.5: 5, 22]。

● マイノリティとしてのムスリム

共産圏において迫害されるマイノリティとしてのムスリムに関する記事も見られた。第13号(1951年8月)には、ソ連領のトルキスタンにおけるムスリム指導者が「祖国を占領し、イスラムの平和を脅かす共産ロシアを倒すことを神に祈る」写真が掲載された[*Qalam* 1951.8: 7]。第26号(1952年9月)では、「共産主義者の迫害からの逃走(Melarikan diri daripada kezaliman komunis)」として、中国から共産党政権の迫害をのがれインド・ボンベイにやってきたムスリムの写真が掲載された[*Qalam* 1952.9: 44]。第18号にお

13) バヤル(1883–1986)はムスタファ・ケマル政権の閣僚として活躍し、第二次大戦後に結成した民主党で1950年の総選挙を勝利し第3代大統領に就任した。ただし、民主党政権は親米的であり、世俗主義の原則もやや緩和されたのみであった。1960年に軍のクーデタがおこりバヤルは大統領を解職された。

14) モサッデグ(1882–1967)は1951年にイラン首相に就任し、イギリス資本所有の石油権益を国有化したが、53年に英米の支持を受けた軍部のクーデタにより失脚した。


写真⑧

写真⑨

いては、USIS提供のブルガリアからトルコに逃げたムスリムの写真が紹介された。「ブルガリアのムスリムは共産党政権の国では保護されず、生活できないためトルコ領へと入ってきた」という解説がつけられている［*Qalam* 1952.1: 19］。

『カラム』はムスリムがマイノリティである地域も含めてイスラム世界に幅広く目配りしていた。当時はどの地域でも脱植民地化と国民国家の建設が進行中であり、ヨーロッパからの政治的独立や経済的な権益の回復が共通の課題であった。『カラム』に掲載された写真からもイスラム勢力からみた政治的課題の共通性がうかがえる。

• 景観としてのイスラム世界

『カラム』の国際記事は政治に関するものが多かったが、そこでは政治指導者だけでなくその地域の景観を示す写真も掲載され、ムスリムたちにイスラム世界の広がりを想像させる材料を提供した。第23号（1952年6月）では、ザアバ（Za' ba）[15] によるイスラムに関する記事の中で、内容とは直接関係がないにもかかわらず、スペインのイスラム建築の写真が「イスラムの過去の栄光の証」として掲載された（写真⑧）。その直後には、南アフリカの「マレー人」[16] の写真が紹介されている［*Qalam* 1952.6: 24, 26］。

また、各地の情勢を紹介する記事にあわせて自然の景観を映した写真が掲載された例も多い。第8号でエジプトが取り上げられた際には綿花栽培する農民の写真が紹介された（写真⑨）。「ナイル川沿いの綿花産業はエジプトで富裕層を生み出している」として、低賃金労働が経済格差を生んでいると主張されている［*Qalam* 1951.3: 29］。このほかにも、第16号でカシミール問題に言及する際には冒頭のページにカシミールの山岳地帯の風景が映し出され［*Qalam* 1951.11: 4］、第13号のマレー語に関する記事のなかでは、ジャワの美しく豊かな風景として棚田が紹介されている［*Qalam* 1951.8: 14］。これらの多様な景観はイスラム世界の広さをアピールするものであったといえよう。

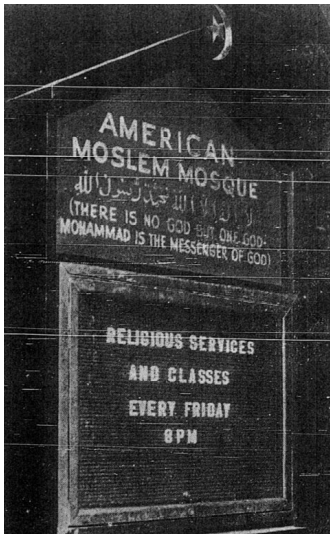
3.「近代」の象徴としてのアメリカ

意外なことに『カラム』はアメリカの写真を多く含んでいた。『カラム』の寄稿者のなかにアフマド・フセイン（Ahmad Husein）というアメリカ・ニューヨーク在住者がいたため、彼が提供したものと思われる。彼は第15号（1951年10月）のニューヨークに関する記事の中で摩天楼の写真を紹介し、第24号の記事は余暇を楽しむニューヨーク市民の写真を伴っていた［*Qalam* 1951.10: 16–17, 1952.7: 13–15］。また、ニューヨークにおけるモスクやムスリムの活動も紹介されている（写真⑩）［*Qalam* 1952.12: 26］。

『カラム』に集った知識人にとって、近代を象徴していたのは宗主国のイギリスではなくアメリカであった。それは、アメリカが当時超大国として西側陣営を指導していたからにほかならない。第12号では、記事とは無関係のニューヨークに凱旋するマッカーサーの写真が掲載され、「英雄となり民族に貢献すれば誉めそやされ、感謝され、逆に民族を裏切れば貶められ、時には殺されるのが世の習い。マッカーサーがニューヨークに到着した際、アメリカ人から祖国の英雄とみられ700万人に迎えられた」と報じた（写真⑪）［*Qalam*

15）ザアバ（本名ザイナルアビディン・アフマド Zainal Abidin Ahmad, 1895–1973）は近代言語としてのマレー（マレーシア）語の体系化に尽力した文学・言語学者である。『カラム』の常連寄稿者であり、CIASのデータベースからは50件の記事が検索できる。

16）南アフリカの喜望峰（ケープ植民地）にはオランダ東インド会社の流刑地があり、ジャワなど東南アジアから送られたケープマレー人と呼ばれる人々が存在した。



写真⑩

写真⑪

写真⑫

1951.7: 54–55]。

近代技術の最高峰としてのアメリカも紹介された。第８号では「自動車産業の発展（Kemajuan perusahaan motokar）」として自動車の発展の歴史を紹介し、フォードやゼネラルモーターズの車の写真を掲載しながら沿革を説明した［*Qalam* 1951.3: 36–38］。同号には、マラヤの農業局の助手がアメリカを訪問している写真も掲載されている。彼らはアメリカの技術援助により1年間訪問中であり、畜産業において卵に試薬を入れて病原菌の検査をしていると解説がつけられた［*Qalam* 1951.3: 31］。

アメリカが生み出した大衆文化にも『カラム』は好奇の眼を向けている。第３号（1950年10月）では、暗くて判読しがたいがアメリカの女子プロレスと思われる写真が掲載された。そして、「これはなんだ！ 進歩的なアメリカ人の女性がレスリングをしている。これは「進歩」のひとつだ。我々にもすでに女子のホッケーチームやバドミントンの選手がいる。我々はさらなる進歩のために女子レスリングをもとう」と書かれている［*Qalam* 1950.10: 37］。当時のアメリカは、様々な面で東南アジアのムスリムが持たないものを持っていたのである。

4.『カラム』の女性像

『カラム』の記事・写真の特徴の一つは女性が多く登場することである。冒頭で述べたように、この時期の大衆的なマレー語雑誌には映画女優などの写真が多く掲載されていた。『カラム』は、それらと路線は異なるものの、報道写真ばかりでなく多様な写真を含んでいた。それとともに、女性の社会進出は第二次世界大戦後の時代性を象徴するものといえよう。本節では、『カラム』がマレー・イスラム社会における女性をどのように報じたかを概観したい。

創刊号の表紙を飾ったのはスカルノ夫人のファトマワティ（Fatmawati）であった。彼女は「近代的な世界に生きているにもかかわらず、トドゥン（ベール）を脱いだことはない」として、近代とイスラムを両立する女性として紹介され、「マラヤの女性たちのなかでインドネシアで最も有名な女性でもトゥドゥンを尊重している例」として紹介されている（写真⑫）［*Qalam* 1950.7–8: 2］。

さらに、創刊号には「プレゼント写真(gambar hadiah)」として、当時のマレー世界で著名な女優であったカスマ・ブーティ(Kasmah Booty)がつけられていた[*Qalam* 1950.7-8: 2]。この付録写真はどのような形態であったかは不明だが、第4号ではUMNO総裁ダト・オン(Dato Onn)の家族の写真がつけられるなど、これ以降もしばしばみられる[*Qalam* 1950.11: 2]。当時の雑誌は、多くが販売促進のための付録を付けていた[Hemedi 2013: 221]。写真は読者を引き付けるための有力な武器だったのである。

海外の王妃や有力者の夫人などが紹介される例も多数みられた。第8号にはイラン国王の結婚が取り上げられ、AP通信の写真として洋装した18歳の夫人が紹介されている[*Qalam* 1951.3: 20]。ムスリムの写真ばかりではない。第27号(1952年10月)の表紙にはシンガポールを訪問中のイギリス王室のケント公爵夫人(Duchess of Kent)[17]の写真が掲載された[*Qalam* 1952.10: 1]。

著名人ばかりでなく、社会に進出する一般女性の姿をも『カラム』は活写している。同誌には「婦人のページ(Halaman kaum ibu)」というコーナーがあり、「女性の権利と自由(Hak dan kebebasan perempuan)」という記事が連載されていた。そこには多くの女性の写真が掲載されており、第7号ではインドネシアでイスラム教育を受ける女子学生の写真が紹介された[*Qalam* 1951.2: 36]。第6号(1951年1月)の表紙を飾ったのはエジプトに留学しているスカート姿のインドネシア人女性(イスラム指導者の娘)3人であった。そして、「彼女たちの到着はエジプト人を驚かせた」として、エジプトには女子学生向けの高等教育機関は存在しないこと、インドネシアと違って女性の国会議員が存在しないことなどが紹介された[*Qalam* 1951.1: 2](写真⑬)。

女性の地位は西洋近代とイスラムの相克の一つのテーマでもあった。『カラム』は近代主義的な思想を持っており、社会に進出する女性を描く一方で、過度に西洋化されたムスリム女性に対しては批判的でもあった。第15号ではパキスタンの女性の志願兵の行進が掲載され、「イスラムでこれは許されるのか?」と疑問を呈した[*Qalam* 1951.10: 10]。第18号ではエジプトで洋装する女性の写真がイスラム的でないと

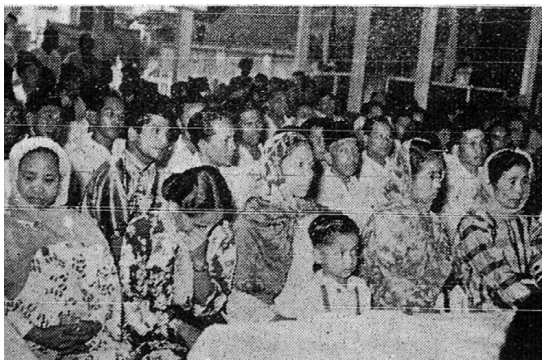
写真⑬

して紹介され、「進歩を性急に追い求めるとこうなるのか!?」と述べられている[*Qalam* 1952.1: 12]。『カラム』の女性観はあくまでイスラムに基づくものであり、西洋近代的な女性像と必ずしも一致するものではなかった。

イスラムと西洋近代の女性像の齟齬を象徴するのが、前述のナドラ事件である。そこでは女性の結婚可能年齢が論争の的となった。ナドラは裁判の途中にムスリム男性との結婚を発表したが、彼女が当時13歳であったため、裁判所は結婚を認めなかった。これに関連して、女性の結婚年齢を16歳以上とする法案が提出された。『カラム』は一般裁判所や法律がムスリムの問題を管轄することに反発してこれに反対の立場をとったが、女性の福祉という観点から賛成するムスリムもおり、賛否両論がみられた。『カラム』では、第3号で法案を支持したムスリム女性福祉協会(Malay Women's Welfare Association)会長のザハラ・ヌルモハメド(Zaharah binti Nur Mohamed)を批判し、法案反対派の集会の写真をのせる一方で[*Qalam* 1950.10: 17-18]、第4号ではザハラが主催した法案に賛成するムスリム女性の集会の写真を(批判的な論調ながら)掲載した[*Qalam* 1950.11: 47][18]。

17) ケント公爵夫人マリナ(Marina, 1906-1968)はギリシャ王室の出身で、1934年イギリスのケント公ジョージ(ジョージ5世の息子)と結婚した。夫は第二次大戦中に飛行機事故で死去したが、彼女はイギリス王室の一員としてさまざまな公務を務めた。

18) シンガポールの立法参事会に提出された法案では宗教にかかわらず結婚の最低年齢を定めるものであったが、ムスリムからの反対により、最終的にはムスリムを除外することで決着した[Haja Maideen 2000: 130-134]。



写真⑭

男女の関係も同誌で議論された点であった。第４号のコラム「女性の権利と自由」のなかでは、ジョホールバルにおいてマラヤのマレー民族主義政党・統一マレー人国民組織（UMNO）党首へのダト・オンの復帰を求める行進に多くの女性が参加している写真が掲載された。ここでは男性に率いられた女性として紹介し、「男性の女性に対する責任とは何か」を問いかけている［*Qalam* 1950.11: 14–15］。

第10号（1951年５月）ではイスラムと慣習（アダット）の関係がとりあげられた。シンガポールのマレー・ムスリムのなかにはスマトラ・ミナンカバウ人の移民が多く含まれていたが、彼らのアダット・プルパティ（Adat perpatih）は母系制であり、特に女性への財産の継承に関する慣習がイスラム法と対立するとみなされたためである。エドルスはイスラム法の相続に関する記事を書いたが、そこにシンガポールにおけるアダット・プルパティの改良運動に参加した女性たちの写真が掲載された。そこでは「アダットがイスラム法に反している一つの例である。男女が交わり、女性が前面に出ている。イスラム法は女性の地位を明確に規定している。新たなアダットがあるのに、アダット・プルパティを変えさえすればよいのか？」。次にUMNOのヌグリスンビラン州[19] ルンバウ支部の婦人部長が男性幹部に挟まれて集会にて話している写真を載せ、男女が交わるアダットを変えようとすると言明したが、男性の間で女性が話すこと自体がイスラムに反しているのではないかと疑問を呈している（写真⑭）［*Qalam* 1951.5: 12–13］。

『カラム』の写真には、時代の潮流を反映して、多くの女性がとりあげられている。ただし、『カラム』は教育を受けて社会に進出する女性は肯定的にとらえているものの、それは西洋近代化とイコールではなく、イスラム教の文脈のなかに女性の地位を位置づけようとしたのである。

おわりに

本論では、1950年代初頭における『カラム』に掲載された写真を紹介し、その世界観を分析することを試みた。そこからいえることは以下の通りである。

第一に、『カラム』は国際ニュースを中心に全世界で撮影された多様な写真を掲載した。写真の提供元は、欧米の情報機関や通信社、インドネシアやパキスタンの当局、『カラム』の執筆者などさまざまであった。これらの写真は、さまざまな地域で戦争や政治運動がおこった激動の時代を映しだしている。

第二に、それらの写真は『カラム』を発行する東南アジアのイスラム知識人の視角で切り取られたものであり、彼らの世界観がうかがえる。『カラム』の写真は、ヨーロッパの植民地統治からの独立にくわえて、西洋近代がもたらした政治・経済体制からの脱却を目指すムスリムの運動を映した。一方で、冷戦体制下における共産主義への敵意は明らかであり、非イスラム圏の親共産主義的な民族運動には共感を示さなかった。

第三に、『カラム』は国際ニュースや政治指導者のみならず、市井の個人や一般的な景観も多くとりあげており、特に社会に進出する女性に焦点が当てられた。これは、出版業の発展により視角に訴えることが有力になった時代を映し出している。ただし、女性は、イスラム対西洋の構図のなかで、あくまで宗教的な正しさが求められた。『カラム』は、アメリカに代表される近代性への憧憬を示す一方で、過度な西洋化も批判した。女性の地位をめぐる近代主義とイスラムの葛藤は現在にまで続く課題といえる。

本論は、創刊当初の『カラム』における写真の役割を明らかにするための試論である。分析の対象を同誌の発行期間全体まで範囲を広げること、同時期の他の媒体との比較を行うことなどにより、その位置づけをより明確にしていくことが可能になるであろう。

19) ヌグリスンビラン州はマラヤのなかでもミナンカバウ人移民の多い州であった。

参考文献

Haja Maideen. 2000. *The Nadra Tragedy: The Maria Hertogh Controversy.* Subang Jaya: Planduk Publications.

Hamedi Mohd Adnan. 2013. *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.

坪井祐司 2011「シンガポールのマレー・ムスリムからみたナドラ問題」坪井祐司、山本博之編『『カラム』の時代Ⅱ――マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No.19)京都大学地域研究統合情報センター、pp.17−24。

坪井祐司 2013「マラヤの独立とシンガポール・ムスリム」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅳ――マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32)京都大学地域研究統合情報センター、pp.21−27。

山本博之 2002「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20、pp 259−343。

1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化

光成 歩

1. はじめに

『カラム』は毎号、政治家から女優まで、その時代を彩る人物の写真で表紙を飾ってきた。記事のなかにも集会や式典などの様子を写真で報じるスペースが少なからずある。そして、『カラム』のなかで「娯楽」の要素を担ったもう一つの欄が、写真や挿絵付きの広告欄である。写真や挿絵、広告のなかで使われる標語や宣伝される商品はまた、雑誌発行当時の読者たちの生活を映す鏡でもある。ここでは、『カラム』に掲載された広告ページに焦点をしぼり、ムスリムの生活、消費文化とその市場について考えてみたい。今回取り上げるのは、創刊号(1950年7・8月号)から第35号(1953年6月号)までの、主に商業広告である。

第1号から第35号までは毎号40～48頁で構成されており、創刊号、断食月明けの大祭(ハリ・ラヤ・アイディルフィトリ)にあたる月では68頁～90頁に増刊されている。35号中、掲載された広告の総数は289におよぶ。このうち92がカラム出版から出された書籍や、エドルスが関わった新たな新聞媒体などの広告だったので、商業広告の総数は残る197である。以下ではこの商業広告について述べることにする。

広告は、断食月明けの増刊号を除いて一号につき1～9本とばらつきがあるが、平均で3.7本が掲載されていた。これに対し、断食月明けの増刊号(第12号、第24号)では、それぞれ38、39本という、通常号の10倍に及ぶ掲載数だった。広告にはほぼ毎号掲載されるものと増刊号のみに掲載されるものとがあり、広告主の数は82社である。

2. 広告の種類

広告の種類は、大きく商品の宣伝を行うものと、小売店の宣伝をするものに分けられる。

商品の広告のうち、商品の種類別で件数の多いものは、ヘアオイル(45件)、食品(27件)、健康食品・強壮剤(20件)、香水(7件)、石油レンジ・ランプ(7件)、肌につける薬用品(6件)、靴(6件)、ラジオ(5件)、腕時計(4件)などである。

小売店の広告のうち、もっとも多いのがバティック、サロン、シルク製品などの布製品を扱う商店のもので(12件)、次に多いのが新聞雑誌や書籍を販売する商店のもの(8件)である(もっとも、後者ではとくに缶詰などの食品、生活雑貨、その一環であるサロンなどを販売しており、両者は厳密に区分できるものではなさそうである)。これら小売店の広告は、断食明け月の増刊号などに掲載されることがほとんどである。

3. 広告にみるムスリムの消費文化

3.1. ヘアオイルと女性の世界

広告数が最も多いヘアオイルの広告は、いずれも女優の写真や女性の挿絵を使うものであった。45件中29件までを占めるのが『ザムザム・ヘアオイル』である。ザムザムとは、イスラムの聖地メッカにあり、水が絶えたことがないと伝えられる聖なる泉の名前である。商品名にザムザムと冠するこの商品がムスリムの購買者をターゲットとしていることは明らかだろう。第2号に掲載されたザムザム・ヘアオイルの広告には次のような文句が並べられている。「ザムザム・ヘアオイルは、有効成分を科学によって加工している。香りはよく、気持ちが悪くなったりはしないし、髪に悪い成分は含まれていない。抜け毛、ふけ対策にも。市場でも好評。生産:ザムザム化学工場」(第2号2頁、1950年9月、写真①)。「ザムザム」という聖地を冠した商品名と、「科学/化学」の技術や知識を強調する謳い文句は、当時のムスリム近代知識人の論調にも合致する。

「ザムザム・ヘアオイル」の広告デザインは3年間で4通りあった。写真②は、「映画女優たちのあいだでも人気」(1950年12月、第5号48頁)と銘打ったものである。一頁大の写真には、髪を結い上げ、バジュ・クバヤ

写真①　ザムザム・ヘアオイル(1)

写真②　ザムザム・ヘアオイル(2)

写真③　ザムザム・ヘアオイル(3)

写真④　パリ・カーリー・ヘアトニック

写真⑤　海カモメ印のヘアオイル

を着たマレー人女優が映っている。

「ザムザム・ヘアオイル」の広告は、オイルの成分や得られる効果を謳うだけでなく、台詞調のキャッチコピーも用いている。次の広告(見出しは「オー！オー！頭皮が呟いている！！！」、写真③)では、頭皮が女優カスマ・ブーティのことを噂する形式でこう続く。「カスマ・ブーティは自分を美しいと思っているわ！ でもみて、彼女の髪がバサバサで抜け毛が多かったら！ 誰かの抜け毛やバサバサを放っておいてはだめ！ 私は彼女にザムザム・ヘアオイルを使うように助言するわ！！」(第7号48頁、1951年2月)。また、1951年10月(第15号13頁) 以降の広告では、シンガポールからきた嫁の髪が黒く美しいのを見たクダの義母が「何の油を使ったらそんなに美しい髪になるの？」と尋ねるという内容になっている。

ヘアオイルでは他にも、「パリ・カーリー・ヘアトニック(巴里捲髪油)」(第4号2頁、1950年11月、写真④)、インド・マドラス産の「海カモメ印のヘアオイル」(第7号2頁、1951年2月、写真⑤)、「ジャムナ・ヘアオイル」(第13号32頁、1951年8月)、「スリビス・アムラ・ヘアオイル」(第22号40頁、1952年5月)、「アラビア・ヘアオイル」(第30号48頁、1953年1月)など多種の広告が打たれている。

「パリ・カーリー・ヘアトニック」の広告は、一部華語で表記されているが、「イスラム教徒が生産しており、もちろん清浄」との但し書きがある。「アラビア・ヘアオイル」はジャウィとタミル文字が併用されている。他方で、「ジャムナ・ヘアオイル」は「ザムザム・ヘアオイル」と同様、「化学工場」製造(工場はクアラルンプール)で、科学技術によって作られた成分で「ふけ、薄毛を防ぎます」と強調している。

3.2. 多言語使用

ひとつの広告に複数の言語が混在する広告はほかにもみられる。典型的なものが、「ブンガ・ラジャ・パフューム(花王香水)」(第12号5頁、1951年7月、写真⑥)の広告だ。英語、ジャウィ、華語、タミル語でそれぞれ文句が書かれている。微笑む挿絵の女性は華人女性のようにもそうでないようにも見える。ジャウィで書かれた文章は「ブンガ・ラジャの香水で、心を虜に」だ。

写真⑥　ブンガ・ラジャ・パフューム（花王香水）

写真⑦　アラビア・ヘアオイル

3.3. アラブ／イスラム世界、マレー世界、中華世界

「メッカ」や「アラビア」など、イスラムにおいて聖なる地名やあるいは「本場」にあたる地名を挙げて、「清浄な」商品、もしくはよりよい商品であることを印象づけようとする広告もみられた。先に挙げた「ザムザム・ヘアオイル」や「アラビア・ヘアオイル」（写真⑦）もその一例であるし、「パリ・カーリー・ヘアトニック」はわざわざ「不浄ではありません」と申し述べている。

「清浄」もしくは「本場」のアピールが多くなされるのが、肌や髪に直接つけるもの、そして口に入れるものである。肌につけるものとしては、ヘアオイルの他に香水（「メッカの香水！　不浄なし！　一滴で七日間！　非常によい香り！　大勢に愛されています！」第34号14頁、1952年５月）がある。この香水の販売者は、クダ州ジトラ在住のハッジである。食品ではアラブ人商店トコ・アルジュナイドの扱う蜂蜜（「フラカ蜂蜜；純正アラブ産、アラブで瓶詰め」第12号53頁、1951年７月）、「ザムザム・ヘアオイル」と同一事業者が販売する紅茶（「ザムザム・ティー；真正のセイロン産で非常に美味」第15号13頁、1951年10月）が挙げられる。なお、ムスリム向けのレストラン（「イスラム・レストラン」第１号39頁、1950年７・８月、「シンガポール・アルバハシュワン・レストラン」第12号66頁、1951年７月）の広告もある。これらはいずれもインド料理店である。

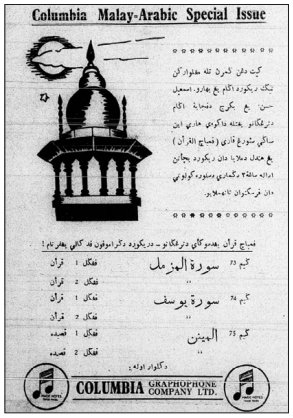
他方、強壮剤、健康食品（薬）のように、口に入れるものであっても「清浄／不浄」「本場」といった宣伝がなされない商品もある。例えば、「奇跡の愛、歓喜を招く美味な天然薬（Cinta Ajaib ubat lazat yang asli mendatangkan keriaan」（第８号23頁、1951年３月）と銘打ったトレンガヌ産の強壮剤の広告がある。ここで使われる「ajaib；奇妙な、奇跡の」という語彙は、マレー世界の伝統医療や呪術療法とのつながりを連想させるものである。

写真⑧　タイガーバーム

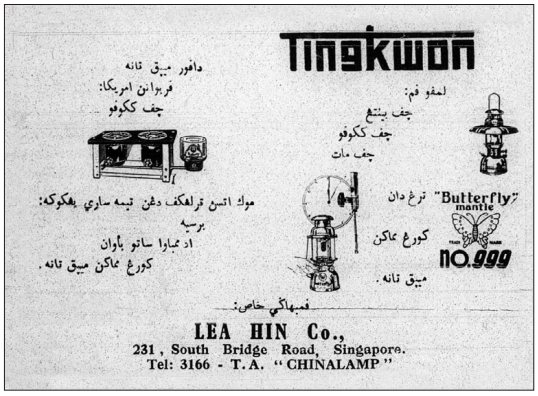
マレー世界や近隣の中華世界での実績も商品のアピールに一役買っている。皮膚病や傷口によいとされる薬用品は、インドネシアでの８年の実績をもとにシンガポールで販売開始するとしている（第10号40頁、1951年５月）し、「超超有名なトラ印の塗り薬！」と紹介されているのは中国由来のタイガーバームである（第24号巻頭広告頁、1952年７月、写真⑧）。

3.4. 宗教コンテンツを届ける

商品そのものに宗教性はないものの、宗教要素を届ける役割をもつ商品も登場する。コーラン朗読を再生できるレコードである。エジプトの人気歌手による歌やコーラン朗読を録音したレコード（第15巻27頁、1951年10月）、トレンガヌの「信頼できるコーラン朗読者」による朗読を録音したレコード（第24巻31頁、1952年７月、写真⑨）の広告が、いずれも断食月明けの増刊号に掲載されている。前者を扱うのはアラブ人商人サイド・ハメド・ビン・アフマド・アルサゴフ（S. Hamed bin Ahmad Alsagoff）で、宗教コンテンツだ



写真⑨　「信頼できるコーラン朗読者」による朗読を録音したレコード



写真⑩　石油コンロの広告

写真⑪　ラジオの広告

写真⑫　自転車の広告

けでなくアラブ世界の新曲も届けている。後者は、アメリカのレコード会社コロンビアである。

3.5. 三種の神器（？）と贅沢品

上述のほか、掲載回数が多いのが靴、石油コンロ・ランプ、ラジオ、乗り物（自転車、バイク）、腕時計、靴などの広告である。石油コンロはアメリカ製で、「石油の消費が少ない」のが売り文句（第12号36a頁、1951年７月、写真⑩）である。ラジオの背景にはデッキでくつろぐ欧米人風の人物達が描かれている。ここではラジオは娯楽の象徴である（第24号79頁、1952年7月、写真⑪）。

1950年代後半の日本社会で「三種の神器」と呼ばれたのが冷蔵庫、洗濯機、テレビの三品の家電製品だった。それぞれが家事労働と娯楽・情報を担っていたことを考えると、コンロやラジオが当時のこれにあたると言えるだろうか。ただしいずれも輸入品であり、「ケンブリッジでの研究の成果」「イングランドで最も有名」（第12号２頁、1951年７月）、「アメリカ製」（前掲）といった文句が商品を箔づけしている。

対して、自転車はイギリス産ハーキュリーズ（「Hercules」第12号32頁、1951年7月、写真⑫）やラレー（「Raleigh」第20号巻頭広告頁、1952年３月）、腕時計はスイス製エベラール（Eberhard）、ロレックス、米国製ブローバ（Bulova）など輸入高級品が並んだ（第12号８頁、10頁、67頁、1951年７月）。

3.6.「偽物に注意」

こうした広告のなかに散見されるのが、「模倣品に注意」「偽代理業者に注意」の文句である。高級品ばかりでなく、「ローズ・シロップ」（第1号39頁、1951年７・８月）や「ザムザム・ヘアオイル」が注意喚起の広告を載せている（第11号31頁、1951年６月）。

4. 広告主について：民族、宗教、拠点

紹介した広告写真からもわかるように、広告主の民族・宗教は多様である。これは、様々な民族がマレー人の生活必需品や消費文化の担い手となっていたことを示している。事業に個人（氏族）名が冠されているものの一部を紹介すると、マレー人の生活に欠かせな

写真⑬　トニックの広告

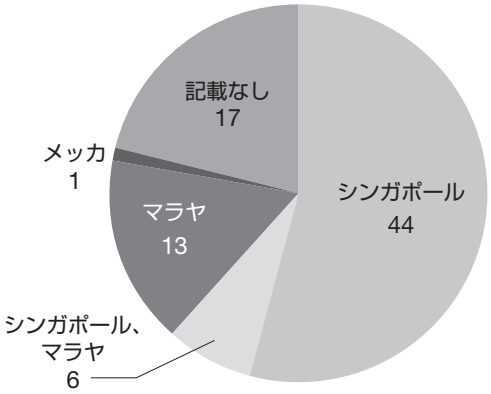


図　広告主の事業拠点

いバティック、サロンなどの布製品を取り扱っている業者の多くはバシャラヒル(Basharahil)家、バハシュワン(Bahashwan)家、アルジュナイド(Aljunied)家などのアラブ人ムスリムたちである。このほかアラビア産の蜂蜜やエジプト製のレコードなどは上述した通りである。布製品の輸入業者にはジアン・シン(Gian Singh)、ジュマボーイ(Jumabhoy)らインド人ムスリムの名も挙げられている。

クダ、クアラルンプール、ペナン、ジョホールなど、マレー半島に拠点をもつ事業者もあり、そのなかでは土地ごとに業種の偏りがみられる。ヘアオイルと香水は、３件がクアラルンプールかクダを拠点としていた。健康食品(薬)もしくは医院の広告は、３件がペラ、１件がトレンガヌ在住の事業者である。ラジオの販売は、５件中３件がジョホールバルの業者である。また、ラジオ販売は、業者名に「ハリウッド」など英単語を冠しているものを除き、少なくとも２件は華人名を冠した事業者が行っている。このほかに事業者名から華人事業と特定できるのは、テイラー、ミシン販売、石油コンロ・ランプ販売、船道具販売、タイガーバーム販売、強壮剤販売(第35号２頁、1953年６月、写真⑬)、痔の専門治療院などである。

数にすると、広告主82社のうち、事業拠点がシンガポール内にあると明記されているものが50社(このうちシンガポールとマラヤ双方に拠点をもつもの６社)、とくに拠点が明記されていないものが17社、マラヤにあるものが13社、中東にあるものが１社となった(グラフ:広告主の事業拠点)。全体の約４分の１がマラヤに拠点をもつ事業者ということになる。『カラム』が読まれていた範囲はインドネシアや南タイを含むとされているが、広告を掲載する事業者はシンガポールとマラヤを拠点とするものに限られていたようだ。

5. おわりに

以上、1950年７月から1953年６月までの３年間35号分の『カラム』広告を概括した。広告から当時のムスリムがどのような市場のなかに身を置いていたのかを知ることができる。広告にはときに複数の言語が横並びに書かれ、商品の売り手や買い手の多様性が表れていた。市場を構成する事業者もまた、華人、インド人、アラブ人、マレー人、そしてヨーロッパ人という多様な人々だった。ヘアオイルや香水のような比較的安価な贅沢品には「ザムザム」「アラビア」「清浄」といった宗教的な価値をアピールする商品が多くみられたが、他方、強壮剤や健康食品、外用薬にはそういった標語はなく、効果や近隣社会での実績を強調する傾向があった。また石油コンロやランプ、ラジオ、靴、自転車、腕時計といった製品では、ヨーロッパやアメリカからの輸入商品であることで、その質やデザインのよさが強調されていた。このように概観すると、宗教や中東と結びつけて語られる付加価値は、ある種の高級感や質を担保する要素としてコンテンツ化したものや、横並びの様々な付加価値のなかの一つにすぎない。宗教が商品のコンテンツでも商品の扱い手は宗教と関係がないというコロンビア社のレコードは、このような市場の成り立ちのなかから生まれてきた事例と言える。

本論では創刊から３年間という期間を区切って検討したため、『カラム』に占める広告の割合など、『カラム』全体の動向と結びつけた検討や、長期的な広告内容の変化の考察にはいたらなかった。今後稿を改めて検討を重ねて行きたい。

マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育

金子 奈央

1. はじめに

本稿は、1950年から1957年に『カラム』誌に掲載された「千一問」(1001 masalah)の記事を主に取り上げ、その他の関連記事も参照しながら、この時期にマレー・コミュニティが家族、子ども、教育といった身近な話題に対してどのような疑問や関心を持っていたのかについて整理する。1950年から1957年という時期は、マラヤ連邦が国家として独立を達成するまでの時期である。独立を目前に控え、自らを取り巻く社会における様々な変化を直に感じていたマレー・ムスリムは、家族という自らが属する最も身近な集団にどのような役割を求めていたのか。また、マレー・コミュニティの未来を担う子どもたちの現状にどのような問題意識を持ち、家庭や学校といった場で子どもたちをどのように育て、教育しようとしていたのか。これらの点について、読者から寄せられた様々な相談にイスラムの立場から答えた連載コラム「千一問」および関連記事を用いて考えてみたい。

2.「家族」をもつこと／「家族」とは

本節では、この時期の「千一問」の記事中で家族に関連するものを抽出し、その内容を紹介する。

女性の結婚適齢期[*Qalam* 1951.2: 40]

【質問】

女性が結婚に適しているのはいつか。

【答え】

イスラムの教えに従えば、女性が結婚できる年齢は月経が始まったらということになる。私の意見は、その女性が妻としての責任を十分に理解できるようになったときが適齢期だと考える。

男性の結婚適齢期 [*Qalam* 1951.6: 16]

【質問】

男性にとって結婚に適しているのはいつか。

【答え】

それを判断するのは難しいが、社会の意見に従えば、20代になったら結婚に適していると考えられる。25歳以上で結婚するのがより良いと考えられるが、結婚という縁は神によって与えられるものである。進んで結婚したいという気持ちが芽生え、活力も十分にあり、努力することができるときこそが結婚に対する縁が訪れたときである。

女性の結婚や離婚に、年齢の制限はあるか [*Qalam* 1951.5: 37]

【質問】

40歳を過ぎて閉経した女性が結婚や離婚をすることは可能か。

【答え】

可能である。

姉さん女房を得ること[*Qalam* 1951.3: 16]

【質問】

年上の女性を妻として迎えてもよいか。

【答え】

年上の女性を妻とするか年下の女性を妻とするかは、各自の気持ちしだいである。しかし、実際には、妻としたいと思える魅力のある人物とは、(年齢ではなく)信心深く、礼儀正し差に満ち溢れている女性である。

来世の伴侶[*Qalam* 1951.3: 17]

【質問】

夫に先立たれた女性が再婚し、(再婚した男性と)生涯添い遂げた。来世ではどちらの男性がこの女性の夫となるのか。

【答え】

この女性が亡くなる際に一緒にいた方の男性(二番目

の夫）が来世の夫となる。

家族計画［*Qalam* 1951.12: 41］

【質問】

私には、12人の子どもがいる。私は子どもをこれ以上（あまり）増やさないようにしたいと考えている。産児制限や、（産児制限による）家族計画といった考えに従ってもよいか。

【答え】

この質問に答える前に、産児制限や家族計画の目的について知る必要がある。我々が読んだニュースの記事によれば、その主要な目的は、どんどん増加する人口に応じて、より広大な土地、より多くの食料が必要となっているから（その問題に対処するため）と考える。宗教団体からの強い反対がなければ、この政策は法制化されるであろう。また、多くの子どもを持つことは、それに伴う多くの責務を負うことを意味する。彼らに十分な教育を与えることができなければ、社会で役に立つ人材となることができなくなる。子どもに十分な教育を与えることは大変であるため、子どもの数を抑えることが求められている。イスラムの教義に従えば、子どもは神からの授かりものであり、それを人間がどうにかすることはできない。

人工授精は可能か［*Qalam* 1951.2: 40］

【質問】

子どもを持つことを切望している女性がいて、夫の同意があれば、夫でない男性の精子を注射などの方法で、その女性の子宮に注入し、妊娠し、出産するとすると、それはどのような報いを受けることになるのか。また、そのような方法で生まれた子どもにはどのような報いがあるか。

【答え】

そのような方法で子どもを授かることはできない。精子は卵子と受精させなければいけないが、精子は子宮に注入するだけでは受精しない。従って、そのような方法ではいかなる成果もない。子どもがそのような方法によって生まれる可能性はないが、（万一に）その方法で生まれた子どもは、不貞の結果生まれた子どもとなる。

不貞行為でできた婚外子について
［*Qalam* 1951.5: 37］

【質問】

適切ではない方法（不貞行為）で得た子どもは、どのような報いを受けるのか。

【答え】

その子どもは、不貞の結果として生まれた子どもであるが、その責任は、（生物学上の）母と父であり、不貞行為を行った当事者二人にある。

婚外子の将来［*Qalam* 1951.3: 16］

【質問】

不貞行為の結果生まれた子どもが大変信仰深い人間となった。この人物は、この信心深さ故に来世で成功することができるのか。

【答え】

神は「人は他人の罪を背負うことはない」と言っている。不貞を犯したのは彼の（生物学上の）父と母であり、その罪に対する責任は、不貞行為を行った当事者が負うべきものである。その子どもは父と母の不貞行為に対する罪を負うことはない。子どもは、彼自身の行いに応じた報いを神から与えられるだろう（良い人間であれば良い報いが、悪い人間であれば悪い報いが）。良いことが起きても悪いことが起きても、彼自身の行いに起因するものである。

両親の行いが間違っていた場合の子どもの対処方法

【質問】

もし、自分の両親の教えや行いが間違っていたら、子どもが強くその間違いを叱責してもよいか。イスラムの教義上、間違っているか。

【答え】

もし両親が間違っていたら、やわらかくその間違いを指摘するのがよい。イスラムは、自分の親を（叩くなど）強く叱り付けることを禁止している。両親は敬わなくてはならない。生まれたときから我々は両親から大切に育てられてきており、従って、両親に対して厳しい態度をとってはいけない。もし、両親が乱暴な言葉を自分に投げかけそうなときは、彼らの怒りが静まるまで近寄らないようにするとよい。

以上のように、家族に関連する記事の中でも、家庭をもつこと、すなわち結婚することや子どもを産むことに関する質問が多くみられた。これらの質問に関連することは、イスラムの教義上、正しい家庭を築くことに基づいた質問内容ということである。イスラムを信仰するものとして「正しい」「あるべき」家庭を築くためには、どの時期に、どのような方法で、どのような

相手と結婚し、どのような方法で子どもを授かることが「正しい」のかについて、「千一問」に投稿して質問することで理解してしようとしていたことが見受けられる。また、家族になった後に関する質問もあり、家族を構成する親と子がどのような関係を築くことがイスラム的に正しいかについても、記事に掲載された質問に答えるという形で主張されている。

3.「子ども」を育てる

『カラム』の「千一問」以外の記事では、子どもについて「この世に生まれた時点では、善でも悪でもない純な状態で生まれ、その後の成長の過程で善や悪を身につける」という立場［*Qalam* 1962.9: 30–34］や、「生まれた時は清らかで正しい状態にあるが、その後の成長過程で正しい道から逸れてしまうことがある」とする立場が［*Qalam* 1953.4: 40–44］述べられている。どちらの記事も、もともと「善」または「純」（善にも悪にも染まっていない状態）であった子どもたちを、正しい方向に導くのも悪い方向へと進ませてしまうのも両親による家庭教育であるとしている。特に、子どもとともに過ごす時間が長い母親の役割を重要視している［*Qalam* 1953.4: 40–44; 1957.5: 44–45］。

当時、子どもの躾に対して責任感のない親がいることが問題視されており［*Qalam* 1953.4: 40–44］、イスラムの規範に基づき、子どもを善良な道徳心を持った正しい人間へと育てるのは家庭で両親の手によってなされるべきであると主張されている。その方法は、子どもの成長段階に応じて使い分けるべきであるとされる。幼い頃は「褒美」や「恐怖」を与えることで善悪を教えることもあり得るが、成長段階が進むにつれて、子どもが良心に基づき自ら考えて善悪の分別を判断できる力を見つけるべきだと説明する［*Qalam* 1953.4: 40–44］。両親は、子どもが自らの良心で善悪の分別ができるようになるよう躾を行わなくてはならない。万が一、子どもが正しい道から逸れた人間となってしまった場合は、両親による家庭教育に問題があったからだと主張している［*Qalam* 1953.4: 40–44］。

同時期の「千一問」でも子どもを育てることに関連した親子の関係についての質問が掲載されている。これらの記事に共通している点は、子どもが結果として親の望む通りの人間に成長しなかった際の要因をどこに求めるかというところにある。この節でまとめたように、『カラム』の記事においては、子どもが万が一「正しい道」から逸れた人間になってしまう（親の望まない方向に向かってしまう）ことになったとしたら、親の家庭教育に問題があったとするものが大半である。

ただし、以下にあげる「千一問」の質問の前半では、「イスラムに関する基礎も体得できていないのは子ども本人の責任」としている。「努力できない人間に成長してしまった」、つまり「あるべき道から逸れた人間になってしまった」ことも含めて、親の家庭教育ではなく子ども自身の問題としている点は、『カラム』の多くの記事で展開されている主張とはやや異なっている。

出来が悪いのは誰の責任か［*Qalam* 1957.8: 19］

【質問】

両親は幼いころから子どもを養育し、学齢期となった子どもは学校またはポンドックでイスラム教育を受け、その子どもの父親は教育費を払い続けた。その後、学業を修了して家に戻ってきた際に、その子どもは預言者ムハンマドの生誕を祝う朗唱をすることさえもできなかった。これは誰の責任か。

【答え】

子ども自身の問題である。彼が勤勉にイスラムについて学ぶことを怠ったことが原因である。

父と母がすすめる結婚を断ることはいけないことか［*Qalam* 1952.9: 13］

【質問】

父と母が自分の娘に好きではない男性と結婚することを強いているとする。この件について、イスラムの教義上、強制的な結婚はないとあった。この娘が結婚を拒否した場合、この娘は不実とされるのか。

【答え】

神は「父と母を敬いなさい」と言っている。両親に対して嫌悪感をあらわす言葉遣いをしたり、乱暴な言葉を投げかけたりしてはいけない。礼儀正しい言葉遣いをしなくてはならない。両親に敬愛の意を示すことは、神に敬愛を示すことにもなる。両親に怒りを示すことは、神に怒りを示すことになる。ハディースには、「子どもに対する大きな権限を持っているのは母親である」「天国は母の足元にある」と言っているものもある。両親に対する愛情を大事にし、それを絶えさせてはいけない。もしあなたが両親への愛情を絶えさせてしまったら、間違いなく神はあなたに光をふり注ぐことをやめるであろう。子どもは、両親の言いつけや要望に忠実に従わなくてはならないと多くのハディー

スが言っており、忠実に守った子どもは現世や来世で幸福を手に入れるだろう。また、イスラムを信仰することは、父と母の要望に従うということである。別の宗教への改宗や、神に背くことを（父と母が）すすめたときは、その望みには従う必要はないが、それ以外の要望については従うべきだ。信仰深い父と母であれば、自分の子どもが不幸になるようなことや、子どもが心を痛めるようなことは見過ごさないであろう。従って、自分たちが選んだ相手と結婚してほしいという父と母の願いは、子どもの安全を確認した上でのことなので、適切だろう。また、子どもの同意を得ないまま結婚させることはないだろう。なぜならば、同意があって初めて結婚は成立するからだ。強制結婚が起こらないようにするためには、父または子どもの良識に基づくべきである。父は、子どもの心を傷つけるような要望をしてはならない。両親の配慮に欠ける対応が子どもの両親に対する不実な行いに繋がるかもしれない。従って、子どもが両親の言うことに従わず、不実になるのは両親の教育に原因がある。

4.「教育」に求められること

マラヤが近代的な国家として独立するにあたり、マレー人の社会経済的上昇のためには教育水準の向上が必要であると考えられた。このような問題意識に従い、マレー人に対し公教育の機会拡大が目指され、それを達成するための施策を講じることが求められた。その一方で、国家の発展に資する公教育は、西洋近代的な世俗教育的特徴を持つものであり、この拡大や普及を危惧する考えも、当時のマレー・コミュニティの中にあった。これは、伝統的イスラム教育の軽視や、それに伴うマレー・コミュニティの道徳観念の揺らぎや乱れに対する危機感である。

『カラム』の記事の中でも、当時のマレー・コミュニティにおける道徳心や信仰心の低下や風紀の乱れが問題視されており、その要因として、西洋的価値観を好む一方でイスラム教育を軽視していることを挙げている［*Qalam* 1955.9: 30–31］。このような社会の変化を好ましく思わず、マレー・コミュニティはイスラムを基盤として形成されているため、自分たちに真の発展をもたらす自律した精神を持つ人材を育成するために必要なのはイスラム教育であるという主張が展開された［*Qalam* 1955.9: 30–31; 1956.12: 20–22］。

成熟した道徳観念を育てるのはイスラム教育の役割であると主張されるが、それを担う場として、『カラム』では二つの方向性が示されている。一つ目は、イスラム教育の場として適切なのは家庭であり、子どもたちを取り巻く地域コミュニティであるとする立場である［*Qalam* 1953.4: 40–44; 1957.5: 44–45; 1962.9: 30–34］。もう一つは、イスラム教育は公的な枠組みの中で生きるべきであると考える立場である［金子2011］。国民国家として生きていかなくてはならない以上、その枠組みに沿った形で、イスラム教育も柔軟に変化しながら、その役割を果たしていくべきとしている。

都会のマレー人の子どもたちの学力の低さについて［*Qalam* 1951.8: 41］

【質問】

なぜ都会のマレー人の子どもたちは学業で成功をおさめることができないのか。

【答え】

全てのマレー人の子どもがそうであるわけではないが、多くの子どもが中等学校段階になるとあまり好成績がとれなくなるのは確かだろう。この原因としては、彼らを怠けさせたり、勉学から彼らを遠ざけてしまう多様な誘惑に遭遇することが多いことが考えられる。このような誘惑は彼らをとても奔放にする。父や母から何かを制限されることがなく、このような環境が学齢期の子どもたちに与えられれば、よほど強い精神力がない限り、子どもたちは自由奔放な状況に甘んじてしまうだろう。

英語の勉強のためにミッションスクールに通ってもよいか［*Qalam* 1951.4: 27］

【質問】

私は英語学校に通いたいが、私が毎朝（キリスト教式の）礼拝をしないことを教員が認めてくれない。英語を勉強するために、（キリスト教式の）祈りをささげたふりをするのは許されないか。

【答え】

アッラー以外に祈りをささげることは許されない。英語を教えることができる人は他にもいるが、アッラーは唯一無二の存在である。イスラム以外の宗教の方法で祈りをささげることは、イスラムの本質を壊してしまうことになる。従って、英語教育を受けることのできる別の場所を探すことをすすめる。

「千一問」では以上のように教育に関連する質問が掲載されている。この時期、独立を前にして、マレー人の

社会経済的な立ち遅れと、教育において他民族と比して劣勢である状況は、マレー・コミュニティにおいて大きな問題であった。この状況に対する問題意識がこのような質問として表れたのだろう。

都会のマレー人の若者たちの学業成績が芳しくない状況を憂いでいる質問については、学力そのものの問題というより、彼らがおかれている環境に問題があると回答側は考えている。都会には、若者にとって多くの誘惑（行き過ぎた自由など）が、そこかしこに転がっている。まだ精神的にも成熟しきっていない若者がこのような誘惑に遭遇しながら、それを全て回避するのは難しいだろうと同意している。その中で、「親からの制限がなければ」とも言及している。都会のマレー人の若者が直面する問題は、「親が制限をかけず自由すぎる環境を子どもたちが享受している」ことが原因の一つとしてあると考えられている。

二番目の質問は、マレー人の社会経済的上昇の手段として可能性としての英語教育と宗教教育の関係に関するものである。上で述べた通り、当時は、自らの社会上昇の手段として西洋近代的な公教育を重視するあまり、イスラム教育の影響力が低下していた。ただし、イスラム教育を重んじないことは、マレー人の若者たちに道徳意識の低下をもたらしたと問題視されていた。公教育が国家や自らを発展させる「生きるための手段」を学ぶ場であるのに対して、イスラム教育は「いかに正しい人間として生きるか」を学ぶ場である。善良で道徳意識の高い人間となることが、結果として個人も国も安定や発展へ導くと考えられている。他の宗教の方法で神に祈りをささげることに対しては、教義上の間違いであると答える同時に、そのような発想（上昇や発展のために実利的な教育を重んじ、信仰や宗教教育を軽視すること）や現状に対しても、この質問に答えることを通して警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は、独立前の時期のマレー・コミュニティが家族、子ども、教育といった身近な話題に対してどのような疑問や関心を持っていたかについて、読者から寄せられた様々な相談にイスラムの立場から答えた連載コラム「千一問」および関連記事を用いて整理した。植民地統治期や独立前後に経験した社会の様々な変化に伴い、人びとの価値観や道徳観念も変化していった。その中で、最も身近な所属集団である家族をどのように形成することが正しい人生を送ることができるのかについて考えるための質問が多く「千一問」に寄せられた。

「正しい」人間を育てるのは家庭の責任であるという主張は、『カラム』の様々な記事で展開されている。「千一問」には、「子どもが親の望んだとおりの人間にならなかった場合の責任の所在」についての問いが寄せられた。イスラムでは両親を敬うことをとても重要にしているが、両親に対する敬意が欠けたり勤勉ではない子どもが成長したりするのは、そのように育てた親の責任であるとする答えがある一方で、怠けた子どもの責任と捉える主張も展開された。

子どもを「教育する」ことに関して、この時期、マレー人が社会的、経済的に上昇するためには十分な教育を受けることが重要であるが、同時に、マレー人の学業においての立ち遅れも問題として挙げられていた。マレー人だから学業の成功をおさめられないのではなく、彼らが置かれている環境が勤勉になることを阻んでいるのだと主張した。また、社会的、経済的な上昇には学校教育が重要となるが、その一方で「正しい」人間となるためのイスラム教育の重要性についても主張された。イスラムの教えに基づいた「正しい」人間としての道徳心や信仰心を持つことが、個人の人生においてもマラヤ国家の発展にとっても重要であるという考えが基盤となっていた。

参考文献

金子奈央 2010「公教育の近代化に対する二重の危機感――マレー・コミュニティにおける子どもの教育論から」山本博之編著『『カラム』の時代――マレー・イスラム世界の「近代」』（CIASディスカッションペーパー No.13）、pp.39-44。

金子奈央 2013「ザアバの教育論」坪井祐司・山本博之 編著『『カラム』の時代Ⅳ――マレー・ムスリムによる言論空間の形成』（CIASディスカッションペーパー No.32）、pp.28-35。

Roff, William R. 1967. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.

Rosnani Hashim. 2004. *Educational Dualism in Malaysia: Implication for Theory and Practice*. Kuala Lumpur: The Other Press.

山本博之 2002「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』第20号、pp.259-343。

『カラム』と独立準備期マラヤにおける宗教的世界観とナショナリズム

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン　　翻訳　鈴木真弓

1. はじめに

20世紀前半、マラヤおよびシンガポールではマレー語の出版物が急激に多く出版されるようになった。この時期の出版物で多くを占めていた話題は、宗教、政治、ナショナリズムに関するものであった。街かどでごく簡単に手に入る新聞に加え、差し迫った話題について議論・提言を行い、読者に考えさせ、人々の考え方に影響を与えるといった性格を持つ定期刊行の雑誌も重要であった。というのも、これらの雑誌はマレー人たちに自分たちの宗教的利益やマレー人という共同体としての利益を達成せねばならないという使命感を植え付ける役割を果たしたためである。当時出版された比較的長命の新聞や雑誌のうち特に重要であるものには、『アル・イスラーム』(al-Islam、1912年～1931年)、『プンガス』(Pengasuh、1918年～1968年)、『アル・イフワーン』(al-Ikhwan、1926年～1931年)、『サウダラ』(Saudara、1928年～1941年)、『ワルタ・マラヤ』(Warta Malaya、1930年～1942年)、『マジュリス』(Majlis、1931年～1955年)、そして『カラム』(Qalam、1950年～1969年)がある。

これらの雑誌・新聞の持っていた力は、それらが定期的に発行されたことに加え、斬新なアイデアや最新の情報を紹介・報道することにより、自分たちのまわりで起きている変化について読者を常にアップデートしていたことにある。政治、経済、宗教などのように、マレー人たちにとって重要かつセンシティブな話題が取りざたされた独立準備期のマラヤという社会的文脈において、雑誌は非常に大きな役割を果たしていた。このような背景を踏まえ、本章では、先に名前を挙げた雑誌の１つである『カラム』をとりあげる。独立準備期のマラヤにおいて、この雑誌がいかにマレー人に自分たちの立場を守るための団結の必要性という認識を高めたかについて、イスラームの宗教的世界観とマレー・ナショナリズムという２つの観点から分析することが本論稿の目的である。

2. 雑誌『カラム』とその影響

『カラム』は、イスラームとマレー文化についての多岐にわたる話題をとりあげる月刊誌として1950年７月に発行された。『カラム』は、マレー人たちに対し、ムスリムとしての信仰心を保つように呼びかけ、宗教的にあるべき姿を説いた。また、マレー人たちに対してナショナリズムの精神を失わないように警鐘をならした。『カラム』は、このような意味において大きな役割を果たしたマレー語雑誌の１冊といえるだろう。また、1950年代の終わりに、『カラム』を除く全てのマレー語雑誌の表記がローマ字表記に変えたのに対し[Yamamoto 2009: 52]、『カラム』は1969年の停刊までジャウィ文字表記を続けた。

その最盛期、『カラム』は刊行当初の発行地であるシンガポールに留まらず、マラヤ、インドネシア、ボルネオ、タイ南部など、東南アジアにおけるムスリム社会に広く読者層を得ていた。その広範な読者層は、1956年の設立によって『カラム』がその事実上の機関誌となるムスリム同胞団(Ikwan al-Muslimin)の団員名簿に読み取ることができる。

『カラム』は、1950年にアフマド・ルトフィによって創刊された。アフマド・ルトフィは、本名をサイド・アブドゥッラー・ビン・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス(Syed Abudullah bin Abdul Hamid al-Edrus)という。彼は後述するように、『カラム』創刊後に間もなくムスリム同胞団を結成し、『カラム』読者に積極的な参加を呼び掛け、ムスリムたちの同胞意識を高めることによってムスリム・コミュニティの団結を訴えた人物である。

アフマド・ルトフィはアラブ人ムスリムであり、ワルタ・マラヤ社(Warta Malaya)やウトゥサン・ムラユ社(Utusan Melayu Press)にて副編集長の職を経て経験を積んだ後、自身でカラム出版社(Qalam Press)を創設した。彼の思想は『カラム』のビジョンや性格に多

大な影響を与えた。『カラム』に収録されている記事を読めば、読者は彼がマレー人をより進歩的なイスラームの理解に導こうとしていたこと、つまり改革的な思考の持ち主であったことが理解できるだろう[1)]。『カラム』に収録されている記事の焦点は、ムスリムたちの改革の必要性に当てられ、政治的・社会的状況が変化を遂げている時代を彼らがいかに生き抜くかに向けられていた。

ムスリムは時代を生き抜くための進歩的な思考が必要であると訴えるのに加え、アフマド・ルトフィは、当時マレー人たちがイスラームの精神からの逸脱と捉えられていた伝統的な宗教的儀式を行っていることに対しても批判的だった。より進歩的な考えを読者に植え付け、強化するため、アフマド・ルトフィはマレー・イスラム世界の内外から改革的思考を持つ論者らの論稿を掲載した。例えば、マレー・イスラム世界の外からはジャマール・アッディーン・アル・アフガーニー(Jamal al-Din al-Afghani)、ムハンマド・アブドゥフ(Muhammad Abduh)、ファリド・ワジディ(Farid Wajdi)がおり、また、マレー・イスラム世界の中からはザアバ(Za' ba)、ブルハヌッディン・アル・ヘルミ(Burhanuddin al-Helmi)、ズルキフリ・ムハンマド(Zulkifli Muhammad)、イサ・アル・アンシャリ(Isa al-Asyari)やハムカ(HAMKA)などである。

アフマド・ルトフィが改革的思考の持ち主であったことは、彼がコラムの中で見せるマレー人の政治的・社会的な状況に関する批判的な所見にも見ることができる。彼が特に批判したのが、当時設立されていたマレー人の政治組織である統一マレー人国民組織(UMNO)だった。アフマド・ルトフィの批判があまりにも痛烈だったため、UMNOの指導者たちは、『カラム』および同じくアフマド・ルトフィによって発行されていた雑誌『ワルタ・マシャラカット』(Warta Masyarakat)を公衆の前で焼き捨てるという事態に発展したほどであった[Yamamoto 2009: 55]。

アフマド・ルトフィがイスラームにのっとった改革を切望していたことは、彼の残した小説にも表れている。4年間に25冊の小説を書いた彼の文才もさることながら、彼の書いた小説には、アフマド・ルトフィの持つ断固とした闘争の精神が発揮されているものがある。例えば、『パレスチナでの聖戦』(Sabil di Palestine)や『1374日間の闘争』(1374 Hari Berjuang)、『闘争現場からの復帰』(Balik dari Medan Perjuangan)などがそれである。彼がものを書くときのスタイルは、20世紀初頭の『アル・イマーム』(al-Imam)や『アル・イフワーン』(al-Ikhwan)といった雑誌や『ファリダ・ハヌム』(Faridah Hanum)という小説を通じてマラヤのムスリムに新たな考え方をもたらした著名な近代化論者、サイド・シャイフ・アル・ハディ(Syed Syeikh al-Hadi)のスタイルを踏襲している。

3. マレー人統合のための宗教的世界観とナショナリズム

『カラム』の言説に対して影響を与えてきたものとして、相互に関連する2つのテーマが存在する。1つはイスラームの再興とその教えをマレー人に広めるという確固とした動機づけであり、もう1つは独立準備期のマラヤにおいてマレー人の政治的な地位向上のためにマレー・ナショナリズムを高揚させることである。両者は互いに密接に関連しており、一方を取れば他方をあきらめねばならないという関係にはない。以下、『カラム』がとりあげた話題を参照しながら、『カラム』がこの2つのテーマについてどのように論じていたかを見ていきたい。

(1)宗教的世界観

イスラーム精神の再興という確固たる信念を持つアフマド・ルトフィという1人のマレー人を筆頭に発行された雑誌として、『カラム』はイスラームの宗教的世界観に関して実に多くのことがらをとりあげている。その中でも重要なのが、イスラームの信仰体系である。イスラームにおいて神の唯一絶対性(タウヒード)は基本原理であり、これに矛盾するすべてのイデオロギーをイスラームは拒絶する。『カラム』には発行当時から無神論の持つ危険性を指摘する論稿が掲載されていた。例えば、「無神論というイデオロギーへの反駁」(Bidasan terhadap Faham Tak Bertuban)や、「逸脱的思考に注意せよ」(Awas Fikiran yang Menyesatkan)などがそれである[*Qalam* 1950.9]。それらの論稿の筆者は、他誌の論稿によって広められていた無神論がムスリムの信仰体系をおびやかしかねないとして、その影響を懸念している[2)]。

1)『カラム』の他に、アフマド・ルフトリは『アネカ・ワルナ』(Aneka Warna、1954年～1959年)や『児童』(Kanak-Kanak、1953年)などの雑誌を刊行し、『ワルタ・マラヤ』(Warta Malaya、1954年)、『ワルタ』(Warta、1953年～1955年)などの新聞を発行したが、いずれも短命に終わった。

2)例えば、マレー語雑誌『マスティカ』(Mastika)には共産主義についてマレー人たちに提起した記事がある。

もっとも、マラヤにおいて強固だったマレー人ムスリムのコミュニティの間で無神論が実際にどの程度脅威であったかは疑問視される部分もあるだろう。事実、『カラム』に掲載されたこれらの論稿が懸念していた無神論は、共産主義と等号で結びつけられるものであった。一般的に、共産主義は、その教義上、神の存在や宗教の重要性を否定する。共産主義に反対する『カラム』執筆者による主張の背景には、当時マラヤとインドネシア双方で勢力を増し続ける共産主義勢力が両国の政治に影響を与えていたということがある。

特にマラヤでは1930年3月30日にマラヤ共産党(Parti Komunis Malaya)が結成されたことをきっかけに、当初中国系住民に限定されていた共産主義のイデオロギーが低所得者層のマレー人にも及ぶようになっていた。労働組合にはマラヤ共産党の党員・支持者たちが溢れ、後に彼らは武器をかまえてゲリラ戦を展開するまでに至っていた。1942年に日本軍がマラヤを占領すると、イギリスは抗日的活動を展開するマラヤ共産党を支持・支援したため、同党のマラヤにおける地位は更に高まった[Mohd. Reduan 2008: 1－17]。

『カラム』は、イスラームの信仰体系をマレー人ムスリム・コミュニティに根付かせるのと同時に、イスラームの最も主要な啓典であるクルアーンの適正な解釈のための議論を掲載することを通じて、ムスリムたちがものごとを理解するためのイスラーム的世界観の枠組を強化しようとした。『カラム』に定期的に寄稿していたアブドゥッラー・バスメ(Abdullah Basmeh)は、「クルアーンの秘密とその哲学」(Rahsia al-Qur'an dan Falsafahnya)と題する連載を寄稿し、当時話題となっていたことがらや科学の進歩などについてのイスラーム的世界観に則った解釈をクルアーンに依拠して展開した。また、彼はクルアーンの真の理解を読者に促そうとムハンマドの伝記を分析し、論文を執筆した[*Qalam* 1951.11: 5]。アブドゥッラー・バスメは、メッカ巡礼、断食、礼拝といったイスラームにおいて基礎とされる実践についての説明も加えている。

『カラム』がイスラーム的世界観に強く影響されていたことは、背教的行為に対して同誌が妥協を許さない立場を取っていることにも読みとれる。例として、1950年12月11日に起きたオランダ人少女ナトラ(Natrah)をめぐって起こされたデモと、この裁判に対する同誌の報道・議論を見てみよう。ナトラは、マラヤのトレンガヌで、マレー人女性アミナ(Aminah)の養女となりマレー人ムスリムとして育てられた。その後、ナトラと血縁関係のあるオランダ人の両親が裁判所に訴え、彼女をアミナのもとから引き離した。シンガポールの裁判所が両親の訴えを認めたことに反発したマレー人たちはシンガポールで大規模なデモを起こした。『カラム』の見地からすれば、この事件はイスラームの優位性とマレー人による支配に対する脅威であった。アフマド・ルトフィは、この裁判に対して中立の立場を崩さなかったUMNOに対しても批判している[*Qalam* 1951.2: 17]。

『カラム』は、この事件はマレー人の支配がないがしろにされている例であるとしてマレー人コミュニティの感情を刺激し、また、養女を奪われたアミナへの同情を誘うべく、数号にわたってこの事件を取り上げた。これとは別に、『カラム』はナトラの写真を販売し、その収入を裁判費用の足しにすることで、アミナがナトラを自分の手に取り戻すことができるように画策している[*Qalam* 1951.1: 2]。例えばある号の『カラム』のキャプションには、次のような言葉が載せられている。「もし彼女〔ナトラ〕の写真を購入すれば、あなたはイスラームに対する強い責任感を示したことになる。というのも、この収益はすべてナトラの裁判において、(われわれの同胞である)マレー人養母を手助けするために使用されるからである」[*Qalam* 1951.1: 2]。

また、『カラム』は、マレー人コミュニティで行われていた非宗教的なことがらのすべてを批判し、イスラーム的世界観やイスラームの精神に立ち返ることの必要性をムスリムに示そうとした。例えばアフマド・ルトフィは、州王らが承認し、UMNOの宗教指導者が正当化した宝くじの導入・実施[3]について政府を厳しく批判している[*Qalam* 1952.1: 14]。宝くじはマレー人には販売しないことが取り決められていたが、宝くじについての説明書をマレー語で書いて配布する販売者もおり、マレー人には宝くじの販売に怒りを覚えるものがいた。宝くじは「福祉くじ」(loteri kebajikan)と呼ばれ、人々の福祉に資するという崇高な目的を持つとされていたが、アフマド・ルトフィの考えでは宝くじの賞金は非合法な出所からのものであり、したがって宝くじはイスラーム的に違法なものであった[*Qalam* 1952.1: 14]。

(2)ムスリム・コミュニティ団結への呼びかけ

マレー・イスラム世界のムスリムたちは、長きにわ

3)宝くじは賭け事であり、イスラームにおいては違法である。クルアーンでは賭け事は非常に大きな罪とされている。

たる植民地統治により、国境によって分けられ、ばらばらになってしまっていた。そのため時代の潮流に取り残され、1つに団結して行動することができずにいた。そのような時代背景において、宗教の名のもとに団結し、植民地支配からの解放のための闘争を行うというムスリム・コミュニティ団結の呼びかけは、ムスリムたちにとって非常に魅力のあるものだった。『カラム』は、世界中のムスリム代表が集まる会合や集会を積極的に報道することを通じてこの意図を伝えようとした。

一例を挙げると、『カラム』は1950年12月25日にパキスタンのカラチで開催された「東南アジア・イスラーム代表者会議」においてイスラーム大学の創設が呼びかけられたことを報じている[*Qalam* 1951.4: 3]。また、『カラム』はパキスタン、イラン、トルコ、パレスチナといった当時ムスリム世界において重要な役割を握っていた各国の代表によるスピーチも掲載している。これら一連の活動に対して冷笑を浴びせるものもいたが、そのようなものたちはアフマド・ルトフィにとって政治的・地理学的な境界を越えたムスリム・コミュニティの団結を否定し、ないがしろにしようとするものたちであった[*Qalam* 1951.4: 3]。

アフマド・ルトフィ自身も、『カラム』を通じてムスリム・コミュニティの団結を実現しようとした。『カラム』読者を主な団員とするムスリム同胞団(Ikhwan al-Muslimin)の結成である。シンガポールのムスリム同胞団は1956年に結成され、同団体の名称は、疑いなく1928年にエジプトでハサン・アル・バンナー(Hassan al-Banna)が創設した同名の団体名を踏襲したものである。エジプトのムスリム同胞団は政治活動と宣教活動で知られ、大衆動員に立脚したイスラーム復興運動を推進した[4)]。このことから、エジプトで1940年代末に盛り上がりを見せたこの運動にアフマド・ルトフィが影響を受けていたことは明白だろう。ムスリム同胞団の団員の中には、マラヤやシンガポール以外からも、ボルネオのサバ、サラワクやタイといった他の東南アジア諸国のムスリムたちもいた[Yamamoto 2009: 57]。

ムスリム・コミュニティの団結を図るための他の方法としては、苦難にある他のムスリムたちに対して共感を持たせることであった。『カラム』はカシミールなど苦難の中にある世界中のムスリムの窮状について報道を行った。インドによるカシミールの侵略行為について、当地のムスリムが置かれた状況についての記事を担当した記者は、カシミールの状態は「噴火を待つ火山」(Gunung berapi yang akan meletup)であるとしている[*Qalam* 1951.11.7]。

(3)イスラーム・アイデンティティとしてのマレー語とジャウィ文字

既に述べたように、『カラム』は1969年にその刊行を終了するまで一貫してジャウィ文字を使い続けた。その背後には、ジャウィ文字をイスラームのアイデンティティとして保持しようとするアフマド・ルトフィの強い意志があった。ジャウィ文字の使用を維持するため、同誌ではジャウィ文字の重要性やジャウィ文字とイスラームとの深い関わりが幾度も強調されている。例えば、ハムカの名で知られる著名なイスラーム学者で、クルアーンの解釈を行っていたインドネシアのハジ・アブドゥル・マリク・カリム・アムルッラー(ハムカ)(Haji Abdul Malik Karim Amrullah、HAMKA)は、「ジャウィ文字を守ろう」(Pertahankan Huruf Jawai)と題する論稿を『カラム』に寄稿している[*Qalam* 1952.2: 43]。ハムカは、文字とは自分自身の思想を表すものと捉え、ジャウィ文字はアラブのイスラームにその起源を持つため、イスラームの世界観を体現するものであるとする。さらに、ジャウィ文字はオランダ人植民地官僚を含めてマレー・イスラム世界の各地で広く使用されていた。また、ハムカは、ジャウィ文字のローマ字化によってもたらされた混乱について興味深い例を挙げて紹介している。「恵み」を意味するni'matという言葉について、アラビア語をローマ字に転写した際に「nikmat」や「niqmat」と表記されるために、アラビア語のもとの意味と反対の意味を持ってしまうことがあるとする[*Qalam* 1952: 41]。

『カラム』に寄せられた他の記事には、ジャウィ文字の使用を続けることはマレー人という国民共同体(Malay nation)の根幹を支えることであるとして、その使用を絶やさないようにと呼びかけるものもある。マレー人はもともとジャウィ文字を用いており、ジャウィ文字は彼らのアイデンティティと切り離せないものであるとし、ジャウィ文字を用いなくなれば、それに関する知識は失われ、最終的にマレー人という国民共同体への愛情を喪失してしまうと論じられた。そのような論調に対し、インドネシアやトルコなど他の強大なムスリム諸国は既にローマ字表記を用いているのだからそれに倣うべきとする意見も存在した。し

4) 1928年にエジプトで結成されたムスリム同胞団(Ikwan al-Muslim)は、1940年代の終わりには団員数が200万人にのぼったといわれる。

かし、ジャウィ文字を守ろうとする論者からすれば、マラヤと他国とでは歴史的背景が異なるためにそのような議論は有効性に欠けるものであり、むしろマラヤは自らの言語を保持することで歴史的・文化的アイデンティティを保ち続ける日本のような国に倣うべきであると考えられていた[*Qalam* 1951.11: 33]。

ジャウィ文字だけでなく、マレー語の強化も『カラム』の重要な関心事項であり続けた。アフマド・ルトフィは『カラム』に権威あるマレー語学者たちの論稿を継続的に掲載した。例えば、ザアバの名で知られ、のちに「学者」(Pendita)という最も権威ある称号を得たザイナル・アビディン・ビン・アフマド(Zainal Abidin bin Ahmad)がその例である。ザアバは、「マレー文芸」(Persuratan Melayu)と題する連載記事を『カラム』に寄稿し、マレー語についての言語学的な解説を行った。

4. ナショナリズムと独立の精神

改めて述べるまでもなく、ナショナリズムとは、あらゆる国家において人々を団結させる重要な要因であった。マレーシアにおいても、植民地支配という環境に生き、また社会・経済的に劣位に置かれたマレー人たちの間でナショナリズムの精神が芽生えた。しかし、マレー・ナショナリズムの高揚に対してより大きな役割を果たしたのは、宗教的指導者に支持され、教育を受けたエリートのマレー人たちであった。彼らはさまざまな団体や政党を結成した。その際にマレー人に独立の精神を広める上で重要な役割を果たしたのは新聞や雑誌などのメディアであり、この点において『カラム』も同様である。

『カラム』のナショナリズムは、次の3つの側面に見ることができる。マレー人コミュニティの団結への呼びかけ、マレー語使用の強調、そして国境を越えた連帯の精神の必要性を説いたことである。

マレー人コミュニティへの団結が呼びかけられたのは、日本の撤退後にマラヤに復帰したイギリスがマラヤ連合を設立しようとしたときだった。イギリスのマラヤ連合構想では、マラヤに居住する各民族がマラヤ連合のもとにまとめられ、民族的な出自に関係なく平等な地位や権利が与えられることになっていた。これに多数派であるマレー人が反発するのは自然なことだった。1946年、マラヤ連合構想に反対するための集会が開かれ、そこでUMNOの結成が提案され、著名なマレー人活動家でジョホール王国の初代宰相を父に持つオン・ジャアファル(Onn Jaafar)が初代総裁として選ばれた。

『カラム』もマラヤ連合構想を批判する論稿を掲載し、そのような議論の展開に重要な役割を果たした。マラヤ連合設立の動きに対し、強固な左翼的思考と反植民地主義という思考の持ち主で、マレー人の権利擁護において発言力を有していた活動家のブルハヌッディン・アル・ヘルミは、同誌に「マラヤにおけるナショナリズム闘争」(Perjuangan Kebangsaan di Malaya)と題する連載記事を書き、懸念を表明している。また、彼はマラヤ連合構想の脅威を読者に説きながら、その構想はマレー・ナショナリズムの真の目標にのっとっていないと論じた。それどころか、彼によれば、1946年のマラヤ連合構想に反対するために開催された第一回マレー人会議で同意された真のマレー・ナショナリズムを唱えるマレー人の闘争を裏切るものであった。このような考えから、彼はマラヤ連合に賛成するマレー人を、他の民族に譲歩してマレー人コミュニティの分裂をもくろむものであると捉え、批判していた。彼はまた、マレー人の権利を支える存在であった州王たちに対しても譲歩することなく、真のマレー人たちを支援するように求めた。

『カラム』が批判の対象としたマレー人指導者の1人に、皮肉にもマラヤ連合を支持する立場に回っていたUMNOの初代総裁オン・ジャアファルがいた。ペラのクアラカンサルで開催された会議において、オンはマレー人の州王や役人、そしてマレー人が全体としてマレー人コミュニティの団結を阻害していると主張した。さらに彼は、シンガポールでナトラ事件をきっかけに起こったデモについて、マレー人によるそのような行為は異国の影響を受けたものであり、マレー人はやみくもにデモに参加しただけだと述べた[*Qalam* 1951.11]。『カラム』誌上で「騙されるな」(Jangan Terpedaya)と題した記事を執筆・掲載したアフマド・ルトフィは、そのようなオンの主張を厳しく非難している。アフマド・ルトフィはオンの主張に対して根拠を求め、またオンのそのような主張の背景には政府を経済的に支援する非マレー人グループを喜ばせようとする意図があると述べた。アフマド・ルトフィによれば、オンによるこのような主張こそマレー人の団結にひびを入れるものであった[*Qalam* 1951: 7]。オンの立場の変化に対し、『カラム』はアフマド・ルトフィ執筆のコラムを筆頭に批判し続け、「崩壊をもたらす支援」(Sokong Membawa Rebah)というマレー語の諺

を引用してマレー人の団結を阻害するやり方を批判した［*Qalam* 1951.2.32］。UMNOを全マラヤ人政党として非マレー人にも開放するというオンのアイデアは一般のマレー人にもUMNOの党員にも受け入れられることがなく、1951年８月に彼はUMNOを脱退してマラヤ独立党（Independence of Malaya Party）を結成し、さらに1954年に国家党（Parti Negara）を結成した。しかし、概してマレー人の賛同を得ることはできず、より包摂的な社会を建設するという彼の目標が達せられることはなかった。

真のナショナリズムの精神はイスラームに連なるという主張を展開するため、『カラム』にはイスラームとナショナリズムの調和を論じる記事や、イスラームにおける政治の位置付けなどを述べる記事が連載された［*Qalam* 1951.4: 16］。これは、ナショナリズムを狭い理解から捉えてイスラームの教えにそぐわないものと捉えようとする理解に対して先手を打ったものであった。

この議論を支持するため、イスラームを国教にする必然性についてのインドネシアのモハマッド・ナッシール（Muhammad Natsir）元首相による演説が『カラム』誌上に掲載された。この演説は、イスラームを国教とすることに反対していたオンへの批判という意図を持って掲載された。『カラム』編集者は「政治とナショナリズム」（Siyasah dan Kebangsaan）の記事において、エジプトのターハ・フセイン（Taha Husayn）元教育相による正義などの基本的な政治的概念をイスラームにのっとって説明したり、イスラームにおける政治について歴史を追って述べたりしている［Qalam 1951.3: 5］。『カラム』による彼の演説の掲載は、宗教は儀式的側面に限られるというマレー人の理解に一石を投じるという意図を持つものであった。

「言葉は民族の魂なり」というマレー語の成句が示すように、マレー語は疑いなくマレー・ナショナリズムを象徴するものであり、マレー人コミュニティを団結させるための要因だった。『カラム』においてもマレー語の重要性は強調され、それは例えばザアバといった著名なマレー語言語学者によるマレー文学の連載に見ることができる。「マレー文芸」などの彼の作品の連載により、『カラム』はより多くの読者を惹きつけた。そしてこのことは、読者の間のマレー・ナショナリズムをより高めることになった。

ムスリムの地域的な連帯を確立しようという本誌の気概は、『カラム』に掲載・報道されているニュースや記事にはっきりと読みとることができる。例えばインドネシアの独立や新政府、そしてインドネシアの大臣の伝記なども多く『カラム』誌上で特集されている。同様に、パキスタンなどの他のムスリム諸国の独立記念日についても掲載されている［*Qalam* 1951.10: 8］。

5. むすび

本章では、独立準備期のマラヤにおいて、宗教的世界観とナショナリズムという２つのテーマがマレー人コミュニティの団結に重要な役割を果たしたことを述べてきた。アフマド・ルトフィは、マレー人コミュニティの団結を阻害する原因は共産主義の影響やオンなどのマレー人政治家たちの発言の他にもあると考えていた。例えば、マレー人が自分たちを取り巻く社会的状況に対して深く考え、理解しようとしないことや、一部のマレー人に見られる個人主義的思考などだった。アフマド・ルトフィは、マレー人指導者にマレー人コミュニティで起きている問題について真剣に議論してほしいと願っていた。また、彼はマレー人が左翼や右翼といった思想的立場の違いを捨て、マレー人として団結して自分たちの地位を守ることを望んでいた。さらに彼は、もしマレー人がばらばらの状態で団結しなければ、非マレー人たちがこの状況を良い機会と捉え、結果的にマレー人コミュニティのさらなる弱体化につながると懸念し、マレー人たちに注意を喚起した。このように、『カラム』は、独立準備期のマラヤにおいて、マレー人ムスリムが自分たちの運命やマラヤ独立への闘争に関して自分たちの考えや切実な願いを掲載した稀有な資料であった。

参考文献

Mohd Fadl Allah Suhaimi. *Peliharalah Tulisan Melayu*.

Mohd Reduan Asli. 2008. *Pemberontan Bersenjata Komunis di Malaysia*. (2nd edition.) Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Yamamoto Hiroyuki. 2009. “The *Jawi* Publication Network and Ideas of Political Communities among the Malay-Speaking Muslims of the 1950’s”. *Journal of Sophia Asian Studies*. No.27.

東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト

2013年度の活動紹介

山本 博之

ジャウィ（アラビア文字表記のマレー・インドネシア語）は、かつてマレーシアやインドネシアなどの東南アジア島嶼部で広く使われていたが、ローマ字化が進んで20世紀半ばまでには日常生活でほとんど使われなくなった。近年、マレーシアではジャウィの重要性が再認識され、小学校でジャウィの読み書きが教えられるようになったが、教材も一般の読み物も不足している。『カラム』は、当時の政治家や宗教的権威に批判的な態度を取ったためにマレーシアの公立図書館には体系的に収集・所蔵されていないが、同誌はマレーシアが独立を経て開発体制を迎える直前の20年にわたって刊行された雑誌で、当時の一般のムスリム住民の動向や考え方を知る貴重な資料である。京大地域研は、マレー語雑誌デジタル化プロジェクトを進め、マレーシアの研究・教育組織であるクラシカメディアの協力のもと、『カラム』のローマ字翻字と記事のデータベース化を進めてきた。

本研究プロジェクトは2013年度に一つの画期を迎えた。これまで本研究プロジェクトが進めてきた『カラム』の収集・デジタル化および記事のローマ字翻字をもとに、マレーシアでオリジナル版（ジャウィ版）とローマ字版を併記した復刻版が刊行されるとともに、イスラム雑誌『カラム』（1950〜69年）を対象とする研究組織により『カラム』研究ジャーナルが創刊された。また、『カラム』のオリジナル誌面はすでに京大地域研のデータベースとして公開済みであるが、これをもとにジャウィ版とローマ字版を対照させたデータベース公開の準備が進められている。

これらの活動は年間を通じて進められたが、その全体をまとめてマレーシアで発表し、関係する各機関・個人とともに今後の展開を検討したのが2013年9月にマレーシアで行われた国際セミナーだった。以下では、まず９月の国際セミナーおよびそれに対する筆者の雑感を紹介した上で、それと一部重複する部分もあるが、項目ごとに今年度の活動内容を紹介したい。

1．国際セミナー「伝統から将来へ」

2013年9月11日、京大地域研およびクラシカメディアらの共催により、マレーシア・クアラルンプールのプトラ・ホテルで国際セミナー「伝統から将来へ」（Dari Warisan ke Wawasan/ From Tradition to Vision）が開催された。この国際セミナーは、『カラム』の復刻版および電子版シリーズの刊行を発表し、あわせて地域情報学による文献保全と『カラム』研究を組み合わせたセミナーとして開催された。

京大地域研からは、林行夫センター長をはじめ、原正一郎副センター長、柳澤雅之（地域情報学プロジェクト代表）、ジュリアン・ブルドン（研究員）、坪井祐司（共同研究プロジェクト研究代表者）および筆者が参加し、東南アジアの現地語文書保全と教育・研究への活用および『カラム』記事分析によるマレーシア史の再検討について報告を行った。

特筆すべきこととして、『カラム』の創刊者で20年にわたって編集長として刊行を続けた故エドルスの４人の子息がセミナーに臨席し、地域研の林行夫センター長より『カラム』復刻版が贈呈された。エドルスの子息たちは、44年ぶりにデジタル版として復活した『カラム』を閲覧して、志半ばでたおれた亡き父の思いを語り合っていた。

国際セミナー「伝統から将来へ」参加者。左よりコタブク理事、エドルスの遺族、林行夫、ムハマド・シュクリ、筆者〈2013年9月11日〉

44年前の父親の仕事を振り返る創始者エドルスの遺族たち。
アフマド・ルトフィという筆名は息子（左側）の名前だった

オリジナル版（ジャウィ）とローマ字翻字版を見開きで配置した『カラム』デラックス復刻版〈2013年９月刊行〉

セミナーのある出席者は、自分が子どもの頃、雑誌を乱雑に扱って床に放ったままにしても叱られなかったけれど、『カラム』だけは放っておくと「これは遊びの書物ではない」と父親に叱られ、部屋の一段高いところにコーランと一緒に置かれたものだったと思い出を語り、『カラム』が「骨のある」雑誌だったことを紹介するとともに、この雑誌に絡めて父親の思い出を紹介した。

筆者がもともと『カラム』に関心を持ったのは、今日のマレーシアで広く見られるナショナリスト史観とは異なるマレーシア像が描かれていたためだった。創刊者のエドルスはカリマンタン島のバンジャルマシン生まれのアラブ系ムスリムで、マレー民族意識が高まりつつあった1930年代のシンガポールでマレー人コミュニティから排除され、自前の雑誌を創刊して誌面を通じてマレー民族主義ではなくムスリム同胞を呼びかけた。今日のマレーシアで高まっているマレー民族主義を相対化する上でも格好の資料である。

ところが、セミナーでは、マレーシアの若い研究者たちが『カラム』を紹介する際に、マレー民族意識の高揚のために書かれた雑誌として紹介していた。これは筆者の『カラム』理解と反対であり、その主張には全く納得できないが、『カラム』研究プロジェクトの発案者である私の意向を完全に無視して彼らなりの関心に即した読みが紹介されたことをたいへん頼もしく感じた。このように、もともと京大地域研が始めた『カラム』研究プロジェクトは、すでに現地社会のものとして動き始めている。『カラム』研究の学会ともいえるアカデミ・ジャウィ・マレーシアが設立され、『カラム』研究ジャーナルも創刊された。議論の下地は整ったため、今後は『カラム』の内容をめぐってマレーシアの人たちと大いに議論していきたい。

2.『カラム』復刻版の刊行

（1）デラックス復刻版（京大地域研）

京大地域研では、『カラム』の創刊号（1950年７／８月刊行）から第77号（1956年12月刊行）までを６巻にまとめた『カラム』デラックス復刻版を刊行し、前述の国際セミナー「伝統から将来へ」で公開した。

『カラム』は、マレーシア・シンガポールの建国期に刊行されて幅広い読者層を得て、刊行時期も20年と長かったにもかかわらず、その後マレーシアやシンガポールでジャウィが日常的に使われなくなったために、雑誌の存在もほとんど忘れかけられていた雑誌である。地域研が主体となって『カラム』が体系的に収集され、ローマ字翻字によってジャウィが読めない人々にも内容が理解できる形で復刻されたことは、マレーシアやシンガポールの各地で暮らすエドルスの遺族たちにとって父エドルスのライフワークの全貌を初めて知る機会となったという。

デラックス復刻版は、左ページにジャウィで綴られたオリジナルの誌面を配し、右ページにローマ字翻字を並べて掲載した。ローマ字翻字版はオリジナルの誌面のデザインを崩さないようにレイアウトされており、ジャウィ版とローマ字版を対照させながら読むことができる。

（2）復刻版シリーズ（クラシカメディア）

地域研のデラックス復刻版に着想を得て、クラシカメディアは2014年３月にジャウィ版とローマ字版を見開きで併記させた復刻版シリーズの刊行を開始した。『カラム』はマレーシア・シンガポールの建国期にあたる1950年代および1960年代に刊行され、教育、政

京大地域研の協力によってクラシカメディアから『カラム』復刻版シリーズが刊行された。ジャウィ学習にも活用できる

『カラム』のコラムを電子版で順次刊行している。「独立インドネシアを訪ねる」(左)、「ナドラ」(右)

治、社会、家庭など広く社会一般の関心を反映した誌面づくりに特徴があり、建国から50年を経てマレーシア史の再評価が進められている今日のマレーシア社会からも高い関心が寄せられている。

第一期としてマレーシア社会の関心が高いマラヤ独立直後の1957年９月号から1958年１月号までの５号分を刊行し、以後、それに続く５号分ずつ刊行される。マレーシア国立図書館の協力のもと、マレーシア国内各地の公立図書館に収蔵される予定である。

京大地域研が刊行したデラックス復刻版から着想を得て、クラシカメディアによる復刻版シリーズでもジャウィ版とローマ字版が見開きで並べられている。ジャウィ版とローマ字版が併記されることで、ジャウィが読めない人にも『カラム』の記事が読めるだけでなく、ジャウィの学習にも役立てることができる。

3. 電子版『カラム』記事の刊行

連載コラムなどテーマごとに『カラム』記事を抜粋し、ローマ字版を編集した抜粋版『カラム』の刊行も行っている。電子書籍なのでスマートフォンやパソコンがあれば入手でき、また、特定のコラムや執筆者の記事の抜粋なのでページ数が多くならず、廉価で入手できることから、一般読者が手軽にカラムの内容を楽しむことができる。

第一期として2013年９月に３タイトルが刊行され、第二期として2013年12月に47タイトルが刊行された(附表参照)。これらはマレーシアの国立言語文化出版局(DBP)の教育・普及部門として2011年に新設されたコタブク(Kota Buku)のウェブサイトを通じて販売されている。最新の刊行状況はコタブクのウェブサイトで確認することができる。

4. ジャウィ教育・研究組織と学術雑誌の立ち上げ

(1)アカデミ・ジャウィ・マレーシア (Akademi Jawi Malaysia)

20世紀半ば以降、東南アジア各地でジャウィは日常的にはほとんど使用されなくなり、現在の若い世代にはジャウィが読めない人も少なくない。こうした事態を改善するため、マレーシアでは数年前に小中学校でジャウィ教育が導入されたが、適切な教材がないことが課題となっている。ジャウィの教材は、基礎的な読み書きを学ぶための簡単な文が並んだもので内容があまり興味を引かないものであるか、中東を舞台としたイスラム教に関する知識をジャウィで書いたもので宗教教育の色合いが濃いもののどちらかしかない。ジャウィで書かれた文献で、現実の自分たちの世界に根差した内容で読み物として楽しめる一般向けのジャウィ教材が求められている。国立言語出版局では、ローマ字で発表された小説をジャウィに翻字して刊行することを試みているが、もともとローマ字で書かれているものをあえてジャウィで読むことの意義がわかりにくく、また、長編小説だと読者が読む負担が大きく、価格の面でも敷居が高くなるとの懸念があり、ジャウィ翻字版を刊行しても制作費の回収が難しいと考えられている。

このような事態を改善するために、マレーシア教育省の著作権担当者の発案により2011年にアカデミ・ジャウィ・マレーシア(Akademi Jawi Malaysia)が設立された。言語教育や出版に関連する機関・団体が集まる緩やかな連合体で、マレーシア国立図書館、マレーシア国立言語出版局、コタブクなどが参加している。

(2)クラシカメディア

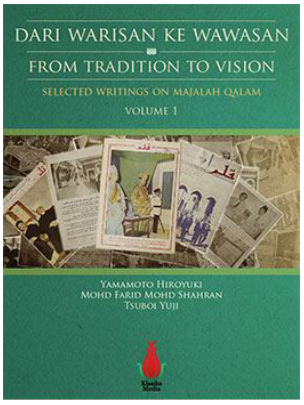
アカデミ・ジャウィ・マレーシアは法人格を持たない。その事務局機能を担うとともに、ジャウィに関する調査研究や教育を担当する組織として、アカデミ・ジャウィ・マレーシアとほぼ同時期に設立されたのがクラシカメディア(Klasika Media)である。

クラシカメディアはマレーシアにおけるジャウィの教育・出版の促進を目的としており、ジャウィ文献の収集、翻字、調査・研究やセミナー・ワークショップの企画実施などを行っている。『カラム』のほか、マレーシア国立図書館が所蔵するジャウィ文献をローマ字に翻字するプロジェクトを請け負っている。2013年9月に京大地域研と学術交流・協力協定を結び、協力してジャウィに関する教材作りや研究を行っている。

(3)学術雑誌の創刊

『カラム』の翻字プロジェクトの進展およびそれに伴うマレーシア側のジャウィ教育・研究制度の整備が進むなかで、『カラム』の研究を目的とした学術雑誌『Dari Warisan ke Wawasan』(伝統から将来へ)が創刊された。第1号は2013年9月に刊行され、第2号は2014年7月に刊行予定である。アカデミ・ジャウィ・マレーシア内に編集委員会を置き、一般の投稿を受け付け、査読を経て年に一号が刊行される。雑誌は電子書籍として刊行され、コタブクを通じて販売される。

第2号では、本研究班がセッション「From Tradidion to Vision: Construction of Digital Archives of Jawi Periodicals for Contemporary Usage」を提供した日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業主催「イスラームと多元文化主義――イスラームとの共生に向けた基礎的研究」(早稲田大学イスラーム地域研究機構)主催の国際セミナー「Islam and Multicuturalism: Coexistence and Symbiosis」をもとにした論文が掲載される予定になっている。



学術雑誌『Dari Warisan ke Wawasan』(伝統から将来へ)第1号(2013年9月刊)

アカデミ・ジャウィ・マレーシア主催のジャウィ・ワークショップ。ASEAN諸国からの留学生を含む80人が参加(2013年4月19~21日、マレーシア工科大学)

5. ジャウィ文献講読ワークショップ

(1)講習会の実施と教科書の作成(日本)

本研究プロジェクトが実施主体となって毎年開催してきたジャウィ文献講読講習会は、2013年度に5回目を迎えた。日本マレーシア学会(JAMS)や地域研究コンソーシアム(JCAS)などの国内の関連学会と連携して開催し、マレーシア研究者だけでなくインドネシア研究者や中東研究者からも幅広い関心を集めている。今年度は2013年10月13日、14日に東京外国語大学で開催した。

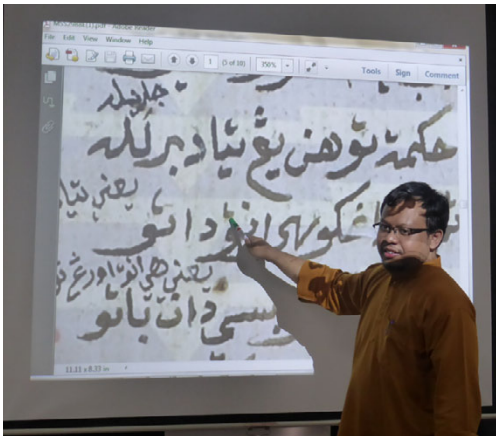
当初は東京大学駒場キャンパスで開催していたが、2011年度からは会場を東京外国語大学のマレーシア語科に移し、ジャウィ講読講習会用の特別教本『ジャウィを学ぶ――ジャウィ文献講読テキスト』を作成している。この教本は、初学者がジャウィ講読を体系的に学習できるだけでなく、ジャウィの歴史的変遷やジャウィ教育の現状、インドネシア・マレーシア地域の時代や地域や分野によって異なるジャウィ文献の例などを紹介し、ジャウィ学習の手引きとして幅広く活用できるよう工夫されている。

(2)ジャウィ翻字学習を通じた職能訓練と教養教育(マレーシア)

マレーシアでは、クラシカメディアが2014年から初級と中級のジャウィ翻字講習会を行っている。

初級(Bengkel Perumian Jawi)は毎月最終木曜日に行われ、第一回は2014年2月26日に開催された。各

参加者は文字を確定する作業を通じて教養を広げることになる
〈初級ジャウィ翻字講習会〉



ジャウィ講読では、正確な綴りを確定するために書き癖にも注意する〈中級ジャウィ翻字講習会〉

回の参加者は８人を上限とし、クラシカメディアを会場として少人数教育で行われている。

第１回の参加者は８名（女性５名、男性３名）で、20代から30代のマレーシア国籍のマレー人だった。いずれも大学を卒業し、現在は事務職などに就いている。参加理由を尋ねてみると、ジャウィそのものに強い関心があるわけではないが、ジャウィの読み書きならできるし、ジャウィのローマ字翻字のアルバイトが副収入になるならありがたいという関心から参加した。

教材には『カラム』の記事を用い、参加者が一人ひとり当てられて誌面を読んでローマ字翻字する方法で進められた。いずれの参加者も、通常の文章は初見でもジャウィをほぼ問題なく読むことができた。地名や人名などの固有名詞、とりわけ欧米の地名や人名が出てくると簡単に読み進められなくなる。ただ文章を読んで理解するだけならば、わからない単語が一つか不達あっても飛ばして読めば文脈は理解できることが多いが、翻字するには正確な綴りを確定させなければならない。

ワークショップでは、これらの外来語や固有名詞、地名の翻字をどう確定させるかを検討した。外来語のうち英単語であれば日常的に使用しており学校でも学んでいるので翻字しやすいが、『カラム』には英単語由来の単語だけでなく、サンスクリット語起源の言葉や欧米の社会思想に由来する概念などさまざまな外来の言葉が登場する。表音文字であるジャウィで記されているために音はだいたいわかるし、前後の文脈から意味もだいたいわかるが、正しい綴りが何なのか確定できない単語がある。これらの綴りを確定させるために、インターネットで単語を検索して正しい綴りを探す工夫が教えられた。いくつかの選択肢から文脈に即しているものを選ぶ上では、探している単語の意味内容についても理解が求められる。

ワークショップに参加したのはマレー人で、アラブ・中東やイスラム教、マレー文化についての知識は常識として持っているが、欧米の社会思想や東アジアの歴史やインド文明などについての知識は限られている。『カラム』を翻字する過程では、『カラム』に即した教養が求められる。翻字を確定させる過程で、結果として参加者は自身の教養を広げることにもなる。参加者の多くは大卒程度の若い世代で、よりよい就職先を求めて技術力アップのために講習会に参加していた。『カラム』の翻字は単にジャウィのローマ字翻字の能力を養成するだけでなく、参加者の教養の幅を広げる役割も果たしている。

翻字を確定させるプロセスもユニークである。ワークショップ会場には各国語の辞書や各種の辞典が置かれているが、講習ではそれらに加えてインターネット検索の工夫に時間が割かれた。Wikipediaで綴りを確認している様子は一見するとお手軽な印象も与えるが、ジャウィをローマ字翻字するもともとの理由が「機械検索の対象にするため」であることを考えるならば、インターネット上で多くの人が用いている綴りに揃えるのはきわめて合理的である。ローマ字の正書法は時代とともに変化するものであり、ここで求められているのは言語学的な正しさではなく機械検索の対象となるという意味での正しさであることが端的にあらわれていた。

中級（Bengkel Kefasihan Jawi）は、毎月第一木曜日に行われ、第一回は2014年３月５日に開催された。中級でも各回の参加者は８人を上限とし、クラシカメディアを会場として少人数教育で行われている。

中級では、前近代に書かれた詩や物語をテキストにした。それらの多くは手書きで書かれ、点を打つ・打たないを含めて綴りのルールの幅が広い。そのため、ローマ字翻字の候補を探す際にも、同じ綴りでたとえば『カラム』なら３通りしか候補が考えられないところが15通りになったりする。また、文脈を踏まえるだけでなく、書き癖を含む文字の特徴を捉える必要がある。ローマ字に翻字するには、ルールを踏まえるだけでなく、文脈を理解し、語句の内容を理解してこそ可能となるという点で、翻字のワークショップは教養や読解力を養う場にもなっていた。

6.『カラム』記事データベース

『カラム』の誌面のPDF版とそれを翻字したローマ字版をもとにデータベースのプロトタイプを作成し、ウェブ上で公開した。ジャウィ版とローマ字版を左右に並べて閲覧できるようにしたほか、多様な利用者を想定して検索方法を工夫した。

データの性格や構造を理解している利用者にとってはアーカイブ型の検索で十分用が足りる。しかし、検索対象の内容や構造について不明な利用者は適切な検索ワードを定めることができない。こうした問題を解消する工夫の一つとして、ワードクラウドを活用した検索ワード提示型のインターフェースを作成した。特定のコラムの記事を集め、それらのコラムで使用頻度の高い単語を抽出し、使用頻度が高い語句ほど文字を大きく表示するワードクラウドの仕組みを利用して検索ワードを提示する。ワードクラウドの単語をクリックすると、その単語の検索結果のページに飛ぶように設定されている。

ワードクラウドを活用すると、使用頻度の多寡が単語の大小で表示されるため、コラムの中で使用頻度の高い単語が一目でわかり、そのコラムの特徴を捉えやすくなる。また、ワードクラウド表示する図の図形をコラムに即した形にデザインすれば、見た目にも親しみが湧き、初学者にも魅力的になるものと期待される。

京大地域研で公開した『カラム』記事データベース
〈http://majalahqalam.kyoto.jp/〉

Islam
orang
Melayu
Kopi
Pahit
Cemetiri
Farouk
kita
agama
mereka
sama
sebab
bangsa
perkara
apa
satu
hantu
sahaja
dahulu
lebih
Jamiah
baik
hati
banyak
boleh
lagi
wang
ahli
besar
sekarang
Onn
Malaya
Singapura
masuk
anak
Quran
UMNO
Haji
Arab
tanah
masa
tali
mahu
tahu
setengah
keras
undang
masjid
Islam
Allah
patut
mata
sebah
Melayu
merka
perkara
banyak
hal
kata
agama
anak
Haji
Arab
Onn
Malaya
Singapura
masuk
ahli
anak
Quran
apa
satu
tali
mahu
tahu
perkara
setengah
keras
masa
masjid
umat
perbuatan
akhbar
undang
Haji
ahli
besar
lagi
wang
sekarang
tanah
UMNO
masjid
masa

附表　電子版『カラム』刊行タイトル一覧

第一期刊行
Perjuangan Kebangsaan di Malaya（マラヤにおける民族主義闘争）
Melawat Indonesia Merdeka（独立インドネシアを訪ねる）
Nadrah - Dari Kaca Mata Qalam（ナドラ――カラムから見る）
第二期刊行
Agama dan Kesannya dalam Jiwa
Bidasan Kepada Faham Tak Bertuhan - Sempadan Kebebasan Berfikir
Awas Fikiran yang Menyesatkan
'Aydi'l-Adha
Wasiat yang Berharga - Khutbah Wida'
Mana Kita Hendak Dibawa - Persidangan Seruan-Seruan Islam Seluruh Asia
Berimanlah Kamu kepada Allah!
Bidasan kepada Faham Tak Bertuhan - Menyekutukan Tuhan
Haqq dan Kebebasan Perempuan - Perempuan Sesudah Baligh
Hari Raya - Orang-Orang Arab di dalam Jahiliyyah dan Islam
Inilah Makkah
Al-Azhar - Qiblat Pengajaran Dunya Islam
Abu Dhar al-Ghifari - Kalau Iman Sudah Mendalam
Ibnu Khaldun - Ahli Sejarah Islam yang Kebilangan
Haqq dan Kebebasan Perempuan - Siti Sarah Menunjukkan Teladan dan Ikutan-Ikutan
Riwayat Hidup 'Ulama Islam Yang Kebilangan_ Haji 'Abdul Manan Kelantan, Tuan Guru yang Berjasa
Bahasa Melayu - Ancaman terhadap Bahasa Melayu
Bahasa Melayu - Kedudukan Bahasa Melayu
Bahasa Melayu - Perkembangan Nahu Bahasa Melayu
Hal Ehwal Tanah Air - Bangsa Melayu Marilah Bersatu
Bahasa Melayu - Langgam Bahasa 'Arab dalam Bahasa Melayu
Kepada Sahabat-Sahabatku di Semenanjung
Cerita Pendek - Khayalku Atau Berhari Raya di Rantau Orang
Kejadian-Kejadian di dalam Dunya ini Adakah Kekal Selama-Lamanya_
Korban Cemburu atau Fir Muhammad-Zahrah Khatun
Gurindam Shurga
Cerita Pendek - Mana Si Awang
Kasih
Tuhanku
Bulan Safar
Apa yang Tuan Susahkan
Riwayat yang Bersejarah - Perempuan Dirasuk Iblis
Kejadian-Kejadian yang Dahshat di dalam Perang Dunia Kedua
Korea dan Riwayat Sekelilingnya
Nehru Diajak Berbuku Lima
Pertubuhan Siyasah Islam
Pengetahuan Umum - Masyumi Pertubuhan Siyasah yang Kuat di Indonesia
Mengambil Peluang Dengan Keadaan Malaya yang Bercampur Qawm
Hal Ehwal Tanah Air - Adakah Melayu Negeri antara Bangsa-Bangsa_
Ruangan Sejarah - Ringkasan Sejarah Perjuangan Indonesia
Pengetahuan Umum - Universiti Islam Indonesia
Menteri-Menteri Negara Persatuan Indonesia
Jeneral Douglas McArthur
Yakov Malik
Rohana Kudus - Srikandi Islam yang Pertama di Indonesia
Mawlana Malik Ibrahim - Penyebaran Islam yang Berjasa di Kepulauan Melayu
Sayyid Shaykh al-Hadi - Pujangga dan Pelopor Kesedaran Politik

執筆者一覧

坪井 祐司（つぼい ゆうじ）
東洋文庫研究員。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。専門はマレーシア近代史。研究テーマはイギリス領マラヤの植民地行政とそれに対するマレー人を中心とした現地の人々の関わり。主な論文は、「英領期マラヤにおける『マレー人』枠組みの形成と移民の位置づけ：スランゴル州のプンフルを事例に」（『東南アジア 歴史と文化』、2004年）。

光成 歩（みつなり あゆみ）
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程在籍。専門はマレーシア地域研究／イスラーム司法制度。研究テーマはマレーシアにおけるイスラーム司法制度の展開と「改宗問題」。主な論文は「現代マレーシアにおける『改宗・棄教』をめぐる語りの構造：非ムスリムによる『リナ・ジョイ係争』への支持言説を手がかりに」（『アジア地域文化研究』、2009年）。

金子 奈央（かねこ なお）
東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程在籍。専門はマレーシア地域研究／比較教育学。研究テーマは、マレーシア・サバ州における原住諸民族の教育活動およびマレーシアの国民統合と教育。主な論文は「教育にみる国民統合政策の展開：『公民および市民性の教育』科目を手掛かりに」（『季刊マレーシアレポート』、2009年）。

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン（Mohd Farid Mohd Shahran）
マレーシア・イスラム理解研究所（IKIM）上級フェロー。専門はイスラム思想・文明。マレーシア国際イスラム大学（IIUM）でイスラム法学を学び、マレーシア・イスラム思想・文明研究所（ISTAC）でイスラム思想研究により修士号および博士号を取得。ISTAC研究助手、IIUM講師を経て2011年より現職。著作多数。マレーシアではテレビやラジオのイスラム番組での説法で知られる。

鈴木 真弓（すずき まゆみ）
シンガポール国立大学博士課程中退。研究テーマはマレーシアにおける多文化主義と文化遺産保護、都市空間をめぐるポリティクス。

山本 博之（やまもと ひろゆき）
京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はマレーシア地域研究／現代史。研究テーマは、イスラム教圏東南アジアの民族と政治、アジアの災害対応、地域研究方法論。著書に『脱植民地化とナショナリズム――英領北ボルネオにおける民族形成』（東京大学出版会、2006年）、編著書に *Bangsa and Umma: Development of People-grouping Concepts in Islamized Southeast Asia*（Kyoto University Press, 2011）がある。

CIAS Discussion Paper No. 40

坪井祐司・山本博之 編著
『カラム』の時代V
近代マレー・ムスリムの日常生活
発　行　2014年3月
発行者　京都大学地域研究統合情報センター
京都市左京区吉田下阿達町46　〒606-8501
電話: 075-753-9603　FAX : 075-753-9602
E-mail: ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp